
深遠の闇に愛されし夜の魔女

要 希沙良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深遠の闇に愛されし夜の魔女

【Nコード】

N9090V

【作者名】

要 希沙良

【あらすじ】

全ての人が運命^{さだめ}と色を持って生まれる世界に私は生まれた。世界に1人だけの色を持って・・・

18年間不吉だと言われ続けても、相棒（愛犬？）のステラとともに健気（？）に生きていたヨル。

しかし、紅の騎士に出会った時、運命は動き出す。急速に惹かれあう2人。

だが、2人の出会いはヨルの運命を大きく変えるものだった。

人物紹介（前書き）

簡単な人物紹介です。

今後、また変わっていくかもしれませんが・・・。

人物紹介

『深遠の闇に愛されし夜の魔女』 ヨル・セラス・セラヴィーン

>年齢< 18歳 >身長< 170? >体重< ××?

>色< 闇 *爪はステラの色を写しているので銀色(透明にラメが入っている感じ)

>職業<魔法使い >ギルドランク<上級

『銀の魔獣』 ステラ

>年齢< 不明 >体長< 2m 尻尾の先まで入れれば2m5

0?はある >体重< ×××?

>色< 銀 *瞳はヨルの色を書いているので闇色

>職業< ヨルのパートナー

『鮮烈なる紅^{あか}き戦士』 グレン・レント・レイハート

>年齢< 25歳 >身長< 186?

>色< 紅^{あか} >職業< 王国直下騎士団所属 紅^{あか}の騎士団団長

『何色にも染まりし調和する者』 ミズト・シン・ウォール

>年齢< 21歳 >身長< 177?

>色< 多色 >職業< 王国直下騎士団所属 紅^{あか}の騎士団副団長

『蒼き魔の流れを汲む戦士』 シアン・ソール・シランド

>年齢< 不明(グレンと仲が良かったため近い年齢と思われる)

>色< 蒼 >職業< 王国直下騎士団所属 蒼の騎士団団長

『銀の騎士』 ソウル

> 職業 < 王国直下騎士団 騎士団総長

『翠の騎士』 ヒスイ

> 職業 < 王国直下騎士団 翠の騎士団団長

『琥珀の騎士』 キンサ

> 職業 < 王国直下騎士団 琥珀の騎士団団長

『白の陛下』

> 職業 < 無国 国王陛下

> 色 < 白

『絶対なる輝かしき金の盾』 レン・フォールド・ホムラ

> 年齢 < 20歳 > 身長 < 180?

> 色 < 金 > 職業 < ホムラ国皇太子

『従者』 シュウ

> 職業 < ホムラ国皇太子の従者

『町長』

>職業< ヨルの住む町の町長
>色< 青緑

第1話 『運命と色』（前書き）

つたない文章で、構成力ありません。
少しずつ勉強していけたらと思います。
暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

第1話 『運命と色』

運命はなんて残酷なんだろう・・・

闇色の瞳に、闇色の髪

闇を纏いし者

それが人々が呼ぶ私の『名』だ。

この世界の人々は、生まれながらに運命さだめと色を纏まとって誕生する。
赤や黄色、桃色だったり色が交じり合った者さえいる。

しかしこの世界の人々は知らなかった。

黒という『色』を知らなかった。

黒という概念はなくとも、人々はそれが何の色か知っている。

夜の『色』。

闇を表す『色』。

人々はこの『色』を纏まとう私を本能的に遠ざける。

私の纏う『色』は不吉なものらしい。

私が背負った運命さだめと色、「深遠の闇に愛されし夜の魔女」。

生まれてすぐに私の立場が決まってしまった。

本当にいい迷惑だ。

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ

私は、早く家に帰りたいという思いに、やや足早に通りを歩いて

いた。

町人達はこちらを見ながら、飽きもせずコソコソといつもの陰口を言っている。

すでに見慣れ、聞き慣れ過ぎて相手にもしたくないが、時折聞こえてくる「・・・闇の・・・目が・・・それに・・・」などという陰口を叩く井戸端会議に熱心なおば様集団にクルリと体を向け、超笑顔で「呪うわよ？」などの、ささやかな仕返しをする事もあったりする（笑）

まさか、本当に呪ったりしないけど・・・（できるけど）

18年間不吉だ不吉だと言われ続けていれば、多少は性格がひねたとしても仕方ないでしょ？

私の運命^{さため}は『夜の魔女』

生まれながらに魔力を持ち、魔法使いになれる運命^{さため}を持って生まれた。

この世界での魔法使いの地位は、平民でさえ国に仕官出来る程高い。

故に、どんなに不吉な色を纏^{まと}つていようと例外なく、魔法学校に無償で通えたのは幸運だった。

そもそも、運命^{さため}とは何か？色を持って生まれるとは何か？

誕生した瞬間に、母親の口を通して運命^{さため}の女神の言霊が降りる。これが運命^{さため}だ。

私の場合も、母の口を通して『夜の魔女』と告げられたはずだ。次に色だが、赤ん坊は誕生した時左手に、『生まれ石』といわれる色の付いた丸いガラス球のような物を持って生まれる。

それが、『色』だ。

当然、私の場合は誰も見たことも無い闇の石だったんだろう。誕生したばかりの赤ん坊は色を纏^{まと}っていない。

髪の色も瞳の色も、透き通ったガラス球のような状態だ。

『生まれ石』を常に肌身離さず装飾品などにして身に付けさせ、

成長と共に球と同じ色を纏っていく。

そうやって生まれた我が子に祝福の意味をこめ、さため運命と色を合わせた言葉を贈るのだ。

私の場合、『深遠の闇に愛されし夜の魔女』になる。

余談だが、婚姻時にはお互いに球を交換しあう。体の一部のような『生まれ石』を相手に贈ることによって、婚姻が成立するのだ。

私は、名も付けられず『深遠の闇に愛されし夜の魔女』と書かれた手紙と共に孤児院の前に捨てられていたので、本当の父も母も知らずに育った。

孤児院の院長先生は闇色も個性と言い切って、周りの反対を押し切り私を引き取り育ててくれ、ヨル・セラス・セラヴィーンというステキな名を贈ってくださった。

ヨルは運命から、さためセラスは、院長先生からの贈り物。セラヴィーンは院長先生のファミリーネームだ。

幼い頃一度だけ、なぜ私を引き取ってくれたのか聞いたことがあった。

「あなたを見つけた時、あんまり綺麗で可愛らしい赤ん坊だったから女神様が私にわたくし宝物を授けて下さったのだと思ったのよ」

「でも闇色だったでしょ？」

「あなたの、髪も、瞳も、とても美しいわ。大人になればとっても美人になるのは間違いないしょ？」

「美人じゃなくていい！普通がよかった！そしたら虐められないもん！！！」

そう言ったら院長先生は少し悲しいお顔をされて、私を抱き寄せた。

「あなたが闇色ではなかったら、出会えなかったかも知れない。こんなに可愛い私の娘^{わたくし}。あなたが、あなたとして生まれたことを私は感謝しているわ。それともこんなおばあちゃんのお母さんは嫌かしら？」

その言葉に私は、勢いよく顔を上げた。

「そんなことないよ！ヨルのお母さんは院長先生だけだもん！院長先生がお母さんがいい！院長先生がお母さんじゃなきゃ嫌だよ！！」

私は始めて、母の愛を知ったんだ。自分が愛されていることに初めて気付いた。

自分のことしか考えず、自分を捨てた母を憎み、闇色の髪を短く切り、精一杯虚勢を張って生きていた。

そうしないと、心が保てないと思った。

生きていけないと思った。

それほど、人々の私に対する風当たりはひどかったのだ。

その日初めて、今までの辛かった事や悲しかったことを泣きながら『お母さん』に聞いてもらって、夜は一緒のベッドで眠った。

『お母さん』がいたから今の私、ヨル・セラス・セラヴィーンはいる。

『お母さん』が誉めてくれたから闇色の髪も長く伸ばして、今は腰まである。

—— 15の夜、『お母さん』が静に息を引き取った。老衰だった。

眠るように、穏やかな顔だった。

私の事をよく思わない人も、このときは沢山『お母さん』に最後のお別れをしにきて、共に泣き、共に思い出を語りあった。

「ありがとう。愛してくれてありがとう。ヨルはあなたがいたから生きてこれた。あなたに恥じないように生きていくから、安らかに眠って下さい。」

愛を教えてくれてありがとう。叱ってくれてありがとう。守ってくれてありがとう。約束通り笑顔で送るから、今は少しだけ・・・少しだけ泣かせてね、お母さん。

お母さんが亡くなって葬儀を済ませたら、すぐに孤児院を出た。

10歳から通っていた魔法使いの学校は、身寄りのない子供には住まいを提供してくれる。

身寄りが無い事の証明所を提出すれば、すぐに用意してくれるらしい。

孤児院の新しい院長はすぐに書類を用意してくれた。（厄介払いか！？）

書類を提出して手続きが済めば、すぐに魔法学校の敷地内にある3階立ての建物に案内され、1人部屋が与えられた。簡素な部屋だが私にとっては城だ。

2年後、無事に卒業して魔法使いの仕事が出来る資格証明書を発行してもらった。

ほとんどの卒業生は王国に就職するので資格証明書は必要ない。私のように、一市民としてギルドで仕事を請け負い、報酬を貰っ

て生活する為には資格証明書が必要なのだ。

あれから1年、いろいろ（？）あったけど何とか生活していける。

ギルドの仕事も少しは請けさせてもらえるようになった。（しばらくは仕事ばかりだけど）

最初は仕事を請けさせてもらえなかったりもしたけど、確実に仕事をこなし、魔法使いとしては上級の部類に入る私に少しずつ仕事を依頼してくれる人も増えた。

それなりの生活はできているはず（？）だが、他人との交流がほとんどないので、一般家庭の生活水準がわからない。

孤児院の頃よりは貧しいかもだけど、自由に生きれている今を不自由だとは感じていなかった。

—— さて、現在私の住んでいる町は、かるうじて王都（？）的な位置にある。

・・・まあ、要はものすごい町外れだ。

どう見ても裕福とはいえない難い人々が数多く住んでいる場所。

その町のさらに町外れまで行くと、道の突き当たり、森を背にしたボロボロの小屋が見えてくる。

その小屋こそ、私が住みかにしている『我が家』だ。

「ただいま」

唯一の同居犬に帰宅の挨拶をし、外套を脱ぎながら家に入っていた。

「ステラ？帰ったよ？」

なかなか姿を見せない同居犬にもう一度声をかけ、少し早めの夕食作りをする為、台所でご飯の支度に取り掛かることにした。

「おかえり〜ヨル。」

奥の部屋から眠たそうな間延びした声が響く。

「ただいまステラ、眠そうな声ね。すぐに夕飯の支度するからもう少しまってね」

のそりと緩慢な動きで、台所に立つ私の横まで来て二本足で立ち上がり、手元を覗き込む。

見た目は狼のような体軀で、体毛は銀色に輝き、瞳はヨルと同じ色^{まこ}を纏っている。

立ち上がると私よりでかいし、見た目も恐ろしげだが、心は乙女（笑）なのだ。

「今日の仕事は、この間の雨で起きた街道の土砂崩れの撤去でしょう？」

「そうだよ。町長つてば、報酬をケチったせいで依頼を受けてくれる魔法使いが現れず困ってたのよね」

「どうせ、その依頼をヨルが引き受けたら、更に報酬をケチられた

んでしょう?。」

毎度のことに我が相棒（愛犬?）が呆れ交じりの顔で言う。

「うん。でも街道沿いの斜面に強化の魔法をかけたら、一年は土砂崩れ起きないよって言ったら「やれ」とか言うからさ、あの報酬では無理って言ってやった!」

「あはははっ!その時の町長の顔が見たかったわ」

床に足を戻しひっくり返って笑っているステラを横目に見ながら

「だから、『今日の仕事は撤去のみでしたので以上で終了です。強化はまたギルドで依頼して下さい。では』って帰ってきた」

「ぷぷぷ!あそこの街道はしょっちゅう土砂崩れがおきてて、町長の悩みの種だったものね。それを簡単に1年は防げるなんて言われたら「やれ」って言うわよね」

（うん。明日ギルドに行くのが楽しみだ。）

一年に一回強化の魔法をかける契約をできれば家計が潤う。

この付近の魔法使いで、年単位で強化の魔法を維持できるのは私くらいだし、食いついてくれればもうけものだ。

第1話 『運命と色』（後書き）

今後は、戦闘や恋愛も入れていきたいと思っています。
亀更新ですがよろしくお願いします。

第2話 『銀の魔獣』

「ステラ？笑ってないでご飯できたから食べよう？」

いまだに、町長の顔を想像してにやけているステラに声をかけた。

「ふう〜、あ〜笑えた！それにしてもヨルもたくましくなったよね。一年前の出会った頃は変に純粹で、騙されたりただ働きさせられたり・・・私は心配ばかりしていたわ。」

あの頃は、本当の意味で1人で生きて行くのは初めてで、必死だった。

「この小屋でステラに出会えてよかった。私の瞳を綺麗だと言ってくれたのはステラで2人目（犬？）だよ。すごく嬉しかった」

—— 1年前

住む場所を探して町の外れの外れまで歩いてきたら、古い小屋が見えてきた。

恐る恐る中に入ってみると、ずいぶん昔の獵師小屋のようだった。天井には蜘蛛の巣が沢山あるし、床は何箇所も抜けている。

窓は割れて無くなっていて、窓枠は腐ってボロボロになっていた。

少々手狭ではあったが部屋が2つと簡素なキッチン。

さらに、浴槽が付いたお風呂場があった。

何年も人の手が入ってない様子を見ると、ここは使われなくなっ
てだいぶたつようだ。

古くて汚いけど、補修して掃除して強化の魔法と動物避けの結果
を敷いておけば十分に住めそうだった。

しかしそこには、意外な住人がいたのだ。

「女！ここは我の住みかだ！立ち去れ！」

狭い小屋に、底冷えするような低い声が響きわたる。

突然の声に驚いた私は、あわてて振り向いた。

そこにいたのは一匹の魔獣。

とても大きな銀色の魔獣だった。

「なんて綺麗な銀色・・・」

私の口から思わず出た言葉に、魔獣は少々面食らったようだ。

「おまえ、我が恐ろしくないのか？ここによく来ていた人間共は我
の姿を見るなり大慌てで立ち去ったぞ？」

（怖い？ううん。銀の毛がキラキラと輝きとても美しい）

狼のよな体つきだがサイズは狼よりでかい。

二本足で立ち上がれば普通の人より大きいだろう。

「銀色とても綺麗。瞳も銀色なのね！とても美しいと思うよ？なぜ
恐ろしいの？」

魔獣の銀の瞳をじつと見つめ、首を傾げながら疑問を口にしてみた。銀の魔獣は牙を剥き出し、恐ろしげに威嚇はしていても殺気がないのだ。恐ろしいわけがない。

ヨルは知っている。他者から向けられる悪意が・・・敵意がどんなものか・・・。幼い頃から身をもつて経験してきた。悪意は心に刺さり、なかなか抜けずとても痛いのだ。

「我は魔獣だ。人を喰らうかとも思わないのか？」

「食べるなら声などかけて警告なんてしないでしょ？はじめまして私は夜の魔女を運命さだめにもち、闇色を纏まといし者ヨル・セラス・セラヴィーンと言います。あなたのお名前は？」

銀の魔獣は零れんばかりに目を見開き、こちらを凝視したかとおもえば、ハッ！と気付いたように私の瞳を見つめてきた。

しばらく凝視された後、銀の魔獣は急に俯いて体をブルブルと震わせ始めた。

ヨルは、突如として異常な行動をとる銀の魔獣に少しひきながらも声をかけてみた。

「アノ？ダイジヨウブデスカ？」

「クツツツツ！！・・・あっはははははは！！死ぬ！笑死にしよう！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（怒）」

どうやら銀の魔獣は、笑っていただけのようだ。（失礼しちゃうよ）

しばらくすると、笑が治まった銀の魔獣は私に近づき、視線を合わせるように顔を下げた。

「闇と夜を統べる魔女、ヨル・セラス・セラヴィーン。あなたと契約を交わしたいと思うのだけどいかが？」

一瞬、何を言っているのかよくわからなかった。

この魔獣は契約と言ったか？

契約とは、弱い相手を服従させる為に無理やり行う契約と、お互いに同意して、死ぬまで共に生きて行く契約の2種類がある。服従の契約は主契約者からの一方的な契約破棄ができるが、同意の契約はどちらかが死ぬまで契約が持続される。魂に刻まれる契約なのだ。

この魔獣が言っているのは間違いなく同意の契約のことだ。

「と、突然何？契約？まさか私と？」

「もちろんあなたと。私、あなたがとても気に入ったの。共に生きてみたいと思うくらいにね。」

「そんな、出会ったばかりだし、それに、私は・・・闇色で、不吉なのに？」

私が不吉という言葉を出すと銀の魔獣はひどく憤った。

「不吉つ！！？その美しい、夜を写した瞳を！髪を！不吉だと言うの！？」

「育ててくれたお母さん以外の人みんな不吉だって言うし、近づいてこないよ？それに、契約は一度したら死ぬまで縛られる。簡単

な気持ちではいけないと教わったわ。」

銀の魔獣は獣のクセ（クセにつてなによ！by ステラ）に大きなため息を吐いた。

「人間は、あなたの美しさに気付かないのね。大丈夫、私があるたと生きてみたいと思ったことは簡単な気持ちではないわ。出会ったばかりとか関係ない、ここで出会えて、確かに今あなたと私の間に絆が生まれた、それで充分よ。それに、一緒にいればきっと楽しいわよ？」

銀の魔獣はまたまた獣のクセに（だからクセにつてなによ！by ステラ）ヨルに向かってウィンクをして見せた。

これから1人で生きていかなければならないと思っていたヨルにとって、銀の魔獣の誘いはとても魅力的な誘惑だった。

「・・・私の、家族になってくれるの？」

「ええ、もちろん。さあ、契約をしましょう！『我が名はステラ！』」

嬉しかった。共にいてくれるという言葉が。

嬉しかった。瞳を、髪を美しいと言ってくれた言葉が。

ステラと名乗った魔獣に後押しされるように、ヨルも意を決し契約の呪文を言霊に乗せる。

「我は夜の魔女を運命さだめにもち、闇色を纏まといし者ヨル・セラス・セラヴィーン。契約に基づき、銀の魔獣ステラに我が色を、夜の魔女ヨルにステラの『色』を与えることを運命さだめの女神に請う」

ヨルとステラの足元にそれぞれ闇色の魔方陣が出現し、ゆったりと回転している。

「ステラ、どこに刻む？私の色を。」

ステラは最初から決めたいたようで、迷うことなく私に告げた。

「瞳に。あなたの、夜を写した美しい瞳を私にも写して欲しいわ」

「・・・じゃあ私は、ステラの色を手の爪に写すね」

ステラの美しい色を瞳に宿したくとも、ヨルの闇色は何をしても違う色には染まらないだろう。

闇は全てを飲み込む色だから。

だからこそ『異端』、だからこそ『特別』。

「ありがとう、ステラ。我とステラに色を刻まん！」

闇の魔方陣は、ステラとヨルの頭上にも現れ、上と下でクルクルと回りつづける。

やがて下の魔方陣と上の魔方陣が近づき、ステラと私をそれぞれ包むように球体になったかと思えば一気に霧散した。

「はい、終り。ステラ目を開けて？」

契約が終了して開いたステラの瞳は、ヨルの『夜』が写されていた。

自分の目で自分以外の闇色の瞳を見たのは、生まれて初めてだ。夜空のようにキラキラと輝いているみたいな美しい夜の瞳。

ヨルの爪には、ステラの星の輝きのような銀が写されていた。

「改めて、ステラ？私の家族になってくれてありがとう。これからよろしく」

「こちらこそ、ヨル。私の大切な片割れ。これからよろしくね」

出会ったばかりのヨルとステラは、まるで一目惚れのごとく超スピードで契約をして、生涯のパートナーになった。

その後、膳は急げとばかりにステラの棲みかであった古い小屋を私が必死に補修して、足りないところは魔法で補助&強化しまくってなんとか人が住める状態にできた。

かくして、棲みかから住みかになった小屋は、ヨルとステラの『家』になったのだ。

「あの頃が懐かしいね。1年っていろいろあったはずなのに、あつという間な感じがするね」

「ご飯を食べながら1年を振り返ってみても、思い出せるのはステラとの楽しく、穏やかな日常ばかりだった。

「そうね、町長が嫌がらせにきたり、こっそり様子を見にきたり、冒険者を雇って立ち退かせようとしたり、いろいろあった気がするのに、過ぎてみればあつという間に感じるわね」

「……ステラって意外と根に持つよね。」

確かにここ1年の間に町長は、あの手この手を使って立ち退きをさせようとしてくる。（全て、丁重にお帰り頂いております（笑））

「毎度毎度懲りないというか・・・町長のぽってりとしたお顔が赤くなったり、青くなったりして面白かったわく」

「私のいない間に何をしていたかは聞かないでおくよ・・・」

今回の街道の斜面の、強化の仕事がうまくいけば、そういった嫌がらせも少なくなるだろう。

明日はギルドに行って今日の報酬と、強化の仕事が入っていないか確認をしよう。

「さて、ご飯も終わつたし訓練しようかな。ステラはどうする？」

「ご飯が終わって部屋の真ん中で寛いでいるステラに声をかけた。

「魔法学校を卒業したのにまだ魔法の訓練続けるの？ヨルは何にもしなくても意思の力で魔法が使えるのに・・・」

魔法学校の生徒は、まず世界の理を学び、仕組みを理解することと、一般の学校と同じ授業を4年間みっちり学ぶ。

残り3年で、発動させたい魔法を構成し固定。と同時に必要な量の魔力を調節しながら放出して、固定してあった魔法を発動させるという訓練をひたすら繰り返す。

卒業試験で、構成・固定・放出・発動をすばやく同時にできれば合格して、無事卒業だ。

構成のイメージをしやすいように、呪文を使う若手魔法使いも多いが、ベテランの魔法使いはほとんど使わない。

だけど、どうやらヨルは『色』だけでなく、魔法使いとしてもかなりの規格外らしい。

ヨルの魔法は意志の力だけで発動してしまうのだ。

用は、＜構成・固定・放出＞をすつとばして、なんとなくのイメージだけで魔法を＜発動＞できてしまうのだ。

魔法学校ですぐに他の人と違うことに気付いたヨルは、それを誰にも告げず、学校ではみんなと同じように＜構成・固定・放出・発動＞を学んだ。

結果的にそれが、精神のトレーニングになり、意志の力で魔法が暴走するなどのこともなく、卒業するころには上級魔法使いの資格を手にしていた。

卒業後は、意志のみの＜発動＞を、いつでもコントロール出来るように訓練を欠かさずしている。

最初の頃は、火をイメージしてみれば巨大な火の玉が現れ、危うく家が燃えつきるところだった。

意志が弱いと魔法も中途半端に発動したりする。火を消したくて大慌てで水を出そうとしたら、ピッチョン・・・え？一滴？みたいなこともあった。

本当は「燃えろ！」と魔力を込めて考えるだけで＜発動＞しちゃうけど、どんな威力で出るか恐ろしくて無闇にはできない。

「精神状態で左右されちゃう私の魔法は強くて弱いんだよ。だから私は自分を知り、理解して、イメージ通りの魔法が発動できるように訓練するの。とつさの時にも、その方が安全でしょ？」

呼吸をするように魔法が使えてしまうヨルには、誰よりも必要な訓練なのだ。

「ヨルは真面目すぎるのよ。でも、確かに自分を知るのは大事なことよね。あんまり無理せずに早めに休むのよ？明日は朝からギルドにいくのしょう？」

「うん。今日の報酬もらってこなくちゃ。後は、町長辺りからいい依頼が来てないか見てくるよ（笑）。ステラは？」

「私は、いつもの夜の散歩に行ってくるわ」

ステラはよく、家の後ろに広がる森で夜の散歩を楽しむ。

夜は森の魔力が活性化するから、魔獣のステラにはとても心地がいいらしい。

何を隠そうヨルも『夜の魔女』だけあって（？）、夜の方が魔法を使いやすいのだ。

なので、魔法の訓練は夕食の後にするのが日課になっていた。

一度、ヨルも散歩について行ったことがあったのだが、明け方に家に帰ってくるなり、もう二度と行かないと心に誓ったのだとか（笑）

「いつてらっしゃい、ステラ。気をつけなくても大丈夫だろうけど、一応気をつけてね」

ステラを送り出した後、いつもどおり魔法の訓練をし、明日の為にヨルは早めに寝ることにした。

第3話 『紅の騎士』

目が覚めると、いつの間にか帰ってきていたステラがベッドの横で寝ていた。

窓の外はまだ少し薄暗いが、鳥達が夜明けを告げるようにせわしなく鳴いている。

まだ眠っているステラを起こさないように、静かに部屋を出た。

小屋には動物避けの結界（ステラは引つかからないよ）と、悪意のある者を入れないための結界を敷いてあるので、警戒心の強いステラでさえ、爆睡できてしまうのだ。

（帰ってきたの遅かったのかな・・・寝かせておいてあげよう。）

——朝ご飯を食べたら、早速ギルドに行くことにした。

この国のギルド本部は、『第1都市 スイエン』にある。

スイエンは王城を中心にドーナツ状の形状をしている。

さらに、スイエンをドーナツ状に囲い、4つのエリアに分けられた都市が、

『第2都市 ビレン』

『第3都市 ハラン』

『第4都市 シブキ』

『第5都市 ハトウ』

それぞれの都市は国王から任命された市長が管理していて、その4つ都市をぐるりと囲うように、大小様々な町がある。

（スイエン以外の都市の住民は、第1都市スイエンのことを『中央』とよんでいる）

ヨルの住んでいるシティは、『第4都市 シブキ』の、管理している町の、外れの外れの……に住んでいる。王都といえば王都だが、『超』がつくど田舎なのだ。

各都市や大きい町にはギルドの支店がいくつかある。すべての支店と本部は転移魔法陣でつながっている為、ギルドの依頼等で他都市に行く時は転移魔法陣で移動する。

もちろん、ギルドに登録して、ギルドカードさえ所持していれば、無料で何度でも使用できる。

とても便利な移動方法だ。

一般の人も使用できるのだが、移動の申請をしてチケットを購入しなければ利用できないようになっていいる。

昔は、ギルド登録が無料なので、移動のみの目的でギルドカードの発行をする人が沢山いたらしい。

それを防ぐ為、ギルドから1ヶ月に3件のノルマを課せられる。

つまりは、最低3件は自動的に仕事が割り振られるのだ。

これで、未達成の仕事がギルドに溢れかえることも、登録したものの仕事がなく餓死する人も、転移魔法陣の大混雑もなくなり、すべてが円滑に解決した。

ノルマの達成が、3ヶ月連続で未達成だとギルドカードを没収され、登録抹消。当然、再登録してもランクは最初から。

ランクが上がれば、宿代の値引きとか、道具の無料支給とか色々な特典があるため、ノルマを真面目にこなす者がほとんどだ。

傭兵はFランクからAランクがあり、仕事をする程度こなしていけば、自動的にランクは上がっていくようになっている。他にSランクと特Sランクというものもあるが、これは王国が認めた傭兵にしか与えられず、それなりに功績がなければ任命されない特別なランクだ。

魔法使いは、下級、中級、上級ランクとあり、魔法学校在学中に、上級の資格までは取得できるようになっている。さらに上の特級とマスターランクは傭兵と同じく王国から任命されなければ取得できない。

上級以上になると、その身一つで、行ったことがある場所なら転移できるので、ヨルも自力で転移してしまうことの方が多い。

ノルマ以外の、大きな依頼や、お金になる依頼は中央のほうが沢山あるのだが、ヨルの容姿は大変目立つので、人の多く集まる本部には極力近づかないようにしていた。

（とりあえず今日はシブキの支店行って、昨日の報酬を貰ってこよう。後は町長が依頼を出していたらラッキーだな。）

いつも通り目立たないように、ギルドから少し離れた裏通りに転移してみれば、ギルドの前になにやら人だかりができていて、その中心に鎧を着けた男の騎士が2人立っていた。

（なんだろ？やだな、騎士もいるじゃん！うう近づきたくないな）

髪と顔を少しでも隠せるように、羽織っているローブをやや目深にかぶり、話が聞き取れる場所まで近づいてみることにした。

どうやら揉めているわけではないようだ。

「本日より、魔法使いと、傭兵の一般公募を開始する！先日雨の影響で、西の大国ホムラとの国境線までの道が土砂崩れで封鎖されてしまっている。」

もう1人の騎士が先を続けた。

「土砂を撤去しても、その先にある川の橋が、雨で増水し、流されてしまっている。これは、王国からギルドに加盟しているもの達への依頼である。今日より5日間以内に道を整備し、橋を架けてほしい。」

どうやら、先日の雨の被害はシブキの街道だけではなくったようだ。

まだ、続きがあるのか、騎士が喋りだした。

「全てのギルドで同時に募集している！報酬は金貨100枚！依頼が完了した後に参加者で分配する。」

その言葉に、集まっていた市民から大きなざわめきが巻き起こった。

当然だ。一般市民が見たこともないような大金だ。金貨1枚あれば2ヶ月は暮らせる。

「ただし、魔法使いは資格証明を提示できる者で中級ランク以上の者、傭兵はギルドの登録ランクがB以上の者のみ参加資格が与えられる！」

（・・・何か作為的なものを感じるけど、国が依頼人だとすれば、選定もこれくらいが普通なのかな？）

騎士の話を聞いていた人々が、あきらめたようにバラバラと散っていく。おそらく参加資格がなかったのだろう。

さて、どうするか？正直迷っていた。金貨100枚を山分け、大変魅力的な話だ。

むやみに信用して痛い目にあうのはもうこりごりだし、そんなことになったらまたステラに怒られる。

（でも依頼は『王国』からだし、まさか報酬をケチることはないだろうけど・・・）

参加資格はある・・・が、今はとりあえず、ギルドに入って、昨日の報酬を貰ってくることにした。

まばらに残る人を避けながら、なるべく目立たないようにギルドの入り口に近いた。

中に入ろうと、扉に手をかけたと同時に、突然声をかけられた。

「失礼。魔法使いとお見受けしますが、先ほどの依頼の話は聞きましたか？」

・・・驚いた。

いや、普通に驚いた。

だって、他人に話しかけられることがほとんどないから（笑）

私は、ゆつくりと振り返った。

騎士の男性は私よりかなり背が高く、見上げなくては顔が見えな

かった。首が痛くなりそうだ。
顔を見上げた瞬間、血のような鮮やかな『色』が目飛び込んできた。

一言で言うなら『鮮烈』

騎士の男性は、赤かった。いや紅か？鮮烈な紅。
見たこともないほどの鮮やかな紅色を纏った騎士がそこにいた。

こちら驚いたが、向こうはもつと驚いたらしい。
目を見開き固まっている。

おそらく、見上げた時に目が合ってしまったためだろうけど・・・
いまだ固まってる騎士に若干呆れながらも、仕方ないと苦笑した。
こんな反応は慣れているし、むしろマシなほうだ。
いまだに固まっている騎士に、こちらから話しかけてみた。

「あゝ？一応話は聞いていましたよ？それがなにか？」

ヨルが話しかけると、固まっていた体がビクリと反応して、凝視していた視線が宙にさ迷いだす。

「あつ！！・・・っ失礼しました。大変珍しい『色』を纏っておいででしたので・・・」

よく見れば、騎士の男性はかなり整った顔をしていた。それに、
人の上に立つ人特有の雰囲気を感じる。纏う空気？というか、存在
自体がとても大きく感じる。

初めての感覚にヨルも戸惑っていた。

騎士の男も、このような事態というか、こんな『色』との対面は

初めてなのだろう。

立派な騎士が、どう対応していいか困って焦っている様子に、ヨルはだんだんおかしくなってきた。

「フツ・・・あはははッ！」

とうとうこらえきれずに笑い出したヨルを見て、さらに困惑する騎士。

それを見て、さらに笑いがこみ上げてくるヨル。

「あはッ、あははははッ！・・・し、失礼しました。私の事を珍しい『色』と表現してくださったのが、なんだかおかしくて。」

（あのときのステラの気持ちだが、今ならわかる気がするわ）

あなたの行動がおかしくて笑えたとは、言わなかった。（言えなかった（笑））

突然笑い出したヨルをしばらく呆然と見つめていた紅^{あか}の騎士は、ヨルの言葉にハツとすると、姿勢を正しながら、自らの非礼を詫びた。

「あつ、いえッ！こちらこそ失礼しました。力のある魔法使いとお見受けし、思わず声をかけてしまいました。」

見ただけでこちらの力量がわかるとは、この紅^{あか}の騎士も相当の力があるようだ。

「そうだったんですか。王国からの依頼の話ですよ？大変興味深いのですが、内容のわりに報酬が破格だったんで、何か裏があるの

ではと勘ぐってしまったて……。魔法使いの性でしょうか、何でも頭だけで考えてしまつて……。悪い癖ですね。」

申し訳なさそうに語るヨルに紅の騎士は大きく顔を振つた。

「とんでもない！それは生きる為に必要な能力です。おそらくあなたは上級魔法使いなのではないですか？我々は特に、協力していただける魔法使いの方を探しています。ここではちょっと話せない内容なので、ギルドの中で話だけでも聞いていただだけませんか？」

——なぜ？

なぜかはわからないが、普段なら自分には関係ないことだと、面倒ことは御免だと早々に立ち去るのに、この時は違った。

魔法使いの直感だろうか？運命の導き？『何』かはわからないが、とてつもない引力を感じた。

この引力に逆らえる気がしない。それほど大きな力。

ステラがここにいたら『運命の導きには従え』と言つただろうか？この紅の騎士に引き付けられる。

目が離せないほどに。

結局、とりあえず話しただけならと承諾し、ギルドの奥にある、交渉スペースに入った。

ギルドの奥には、依頼人との細かい打ち合わせ用の交渉スペースとして、布に仕切られたいくつかの個室がある。

その一室に2人の騎士とともに入り、改めて自己紹介をした。

「申遅れましたが私は王国騎士の、紅を纏あかまといし者グレン・レント・レイハートと申します。こいつは部下の・・・」

グレンの言葉をさえぎって部下と言われた騎士が言葉を続けた。

「私は、ミックスのミスト・シン・ウォールと申します。」

紹介を受けて、わずかに目を見張る。多色纏う者をミックスと言うが、このミストは3色？いや4色ほど色が混ざって見える。彼も、ある意味『異色』な存在なのだろう。

初対面時の自己紹介は通常略式で行う。よく知らない相手にいきなり自分の運命さだめや色の事情を話したりはしないが、公式な場所や目上の方に求められれば、正式な自己紹介をしなければならない。

正直、逡巡した。

瞳の色はもうばれているのだが、ローブを取ってしまったていいものか。

（瞳を見られたのだから、グレンという騎士も予想はしているだろうけど・・・まあいいか。取っちゃえ）

ヨルはゆつくりとローブを取ると、わずかに息を呑む気配が伝わってきた。

そのまま頭を下げると、自然と腰まで真っ直ぐに伸びた闇色の髪が、肩からこぼれ落ちた。

「初めまして。私は、闇を纏まといし者ヨル・セラス・セラヴィーンと申します。上級魔法使いのランクにいます。」

私は、そつと顔を上げ、グレンとミズトの顔を正面から見据えた。

第3話 『紅の騎士』（後書き）

少し、物語りが動きだしました。

文章を書く難しさを痛感しております（汗）

亀更新ですが、頑張るので、よろしく願います！

第4話 『王国の危機』

グレンとミズトはヨルの素顔を正面からみた状態で・・・固まった。

それは見事に固まった。

（やつぱり・・・、まあ仕方ないし・・・）

どう、反応していいかわからず困っているのであろう2人だが、ヨル自身はそんな反応は慣れっこだった。

「すみません。みなさん、私の姿を見ると畏怖や恐怖、奇異な目で見てきます。お二方もこのような『色』を見るのは初めてで、困惑されたでしょう？」

気持ち悪がられても仕方ないと思った。お母さんとステラ以外の人からは常に不気味がられて嫌悪されてるし、むしろそれが『日常』だったのだから。

悲しげな顔でヨルが謝罪するのをみて、グレンが再び詫びた。

「しつ、失礼しました。あまりにも・・・、あまりにも見事な闇色だったので、つい見とれてしまいました。夜の色ですね、艶やかで、新月の夜の時のような、深遠の美しさを感じます。」

お世辞にしても言い方があるだろう、しかしグレンには人の本質

を見抜く力があるのだろうか？

たとえ社交辞令だとしても、言われた瞬間に大きく心が震えた。

真っ直ぐにこちらを見つめる鮮やかな紅い瞳^{あか}。

とても、社交辞令で言っているとは思えない、穏やかな瞳がヨルを見つめていた。

「ど、どうしました？？大丈夫ですか？」

突然、少し焦っているような、困惑したグレンがこちらを覗き込んできた。

訳がわからず、首を傾げているヨルに、グレンはそつと右手を差し出した。

「え？」

ゆっくりと、グレンの大きく暖かい手が、ヨルの頬を伝う涙を拭いた。

「あの、涙が・・・」

ヨルは涙を流す自分に全く気付いていなかった。

今まで黙って事の成り行きを見ていたミストが、突然口を開いた。

「自分にはわかる気がします。グレン団長は天然ですから」

ヨルが、よくわからないという感じで、瞬きを2、3度繰り返すと、ミストは優しく微笑んだ。

「見ての通り、自分も少し特殊ですから、今まで色々ありました。

人の言葉の裏に潜む本心が怖くて、人を信じる事が出来なかった。でも団長に出会って、なんだかそんなことを悩んでいた自分が馬鹿らしくなりましたよ。だってこの人天然ですから。団長の裏も表もない言葉は心に響くんです。あなたも、嬉しかったんですよね？」

ヨルはミズトの言葉を反芻しながら、グレンを見つめた。

「・・・嬉しかった？」

涙に濡れたキラキラと輝くヨルの瞳にジッと見つめられ、グレンは一瞬たじろいだ。

ヨルの瞳には力がある。引き付けられる力。見つめられると、あつという間に引き込まれそうだ。

「あなたも色々苦労したのでしょう？自分もグレン団長に出会うまでは常に回りに壁をはって生きていました。大丈夫です、この人はお世辞など言える器用な性格ではありませんから安心してください」

ミズトの言葉に、グレンは非常に複雑な顔をしていた。

「なんか、けなされているのか、誉められているのかわからないんだが？」

「もちろん、最高の誉め言葉です」

グレンの複雑な顔を見ながら、ミズトは自身満々笑顔で言い放った。

2人のやり取りを見ていたヨルは、優しく微笑むミズトの瞳を見つめ、ミズトもヨルの瞳を見つめた。

（ああ、この人の瞳にも悲しみがある。私と同じ孤独を知っている人だ。）

ヨルは、そつと目を伏せ大きく深呼吸をしてみた。

「そう、ですね・・・色々ありました。人を信じることは今も難しいです。でも、あなた方のような人と出会えるのなら悪くありません。人を拒絶しなくて良かった。優しい言葉をありがとう」

そついつてヨルは18歳らしい笑顔を、普段はステラにしか見せない笑顔を2人に向けた。

ヨルの不意打ちの笑顔を真正面から見た2人は、顔を赤らめ俯いてしまった。

「どうしました？」

ヨルの問いかけにグレンは慌てて先を続けた。

「いいえ！何でもありません！さあ、話の続きをしましょうか？」

（笑顔が可愛すぎて直視できなかつたなんて言えないし！！）×2

「さっきの王国からの依頼の話ですね？」

ヨルは、深刻な話になりそうな予感に、空気までもが張り詰めて

いくように感じていた。

正式に協力を仰ぐ為に、グレンとミストは、王国からの密命をヨルに全て話すと決めた。

何よりも時間がない。若干の焦りが滲んだ声でグレンは話を続けていく。

「そうです。西の大国ホムラまでの道は現在土砂で埋まっている。・・と、いうことになっています。というより、混乱を防ぐ為に、そうせざるを得なかったのです」

どこか苦しそうに語るグレンに、ヨルは、ただ事ではないことが起こっているのだと察し、息を呑んだ。

「やはり、あの依頼は作為的に力のある者を選別する為のものなんですか？ただの土砂撤去にランクの指定なんておかしいなって思っていました。」

ヨルの言葉に、グレンは苦笑いを浮かべる。

「はい。かなり無茶な依頼ですが、こちらも時間がないので・・。多少無茶な依頼でも、王国からの依頼なら、多少の違和感は無視しとくれればと、思っていました。」

ミストもグレンの言葉に肯定するように頷いた。

「依頼には、土砂撤去以外に橋を架けるというのもありましたよね？しかも傭兵のBランク以上と、魔法使い中級以上なんて、かなり実戦向きのランクですよ、まさか戦争でも始めるんですか？？」

軽い冗談で言っただつもりだったのに、2人ともなんだか気まずそ

うにしている。

そして、ものすごく嫌な予感がする。

「もしかして、まさかのまさかですか!？」

グレンをチラリと見やり、頷くのを見てから、ミストは話を続けた。

「はい。その『まさか』なんです……。我々は、力のある傭兵と魔法使いをスカウトしてきました。戦争は……。すでに始まっています。国内でも、まもなく陛下から発表され、避難が始まる予定です。すでに、ホムラ国が進軍を始めて10日。あと5日程で国境の川にたどりつくでしょう。その前に強固な防衛線を築きたいと国王は考えておいでです。」

グレンが、話を引継ぎいだ。

「そこからは、私が言おう。騙して雇うつもりは決してありません。引き受けてくれるもの全員に真実を伝え、正式に王国が雇う話を話します。ただ、時間がありません。特に魔法使いが圧倒的に足りていないのです。どうか力をお貸しいただきませんか？」

城や中央には沢山の騎士や兵士、魔法使いがいるはず。

なのに、市民から戦争の為に人員を雇わなければいけない状態ということとは……

「すでに被害が出ているのですか？」

グレンとミストが息を呑んだ。

おそらく事実なのだろう。

ここまで話しておいて隠し事も必要ないと判断したグレンは、真実を語るために口を開いた。

「我が国には、都市の名はありますが、国の名はありません。初代国王陛下は、『国は己の持ち物ではない。わざわざ所有物のように、名など付けなくていい。ここに家があり、人々が幸せに暮らしていければそれでいいじゃないか』とおっしゃったからです。国民あつての国、国とは自分を含め、国民全員のもので考えられていたそうです。ですから、近隣の国からは名の無き国『無国』と呼ばれています。」

グレンは、大きく息を吐き、搾り出すような声で話しを続けた。

「10日前に、スイエンにある軍施設が直接魔法攻撃され、多数の死傷者が出ました。その直後に、ホムラ国と我が国の間にある中立商業都市『エンエン』に駐屯している我が国の守備軍が・・・全滅しました。そして、ホムラ国国王から『名無き国をホムラの名で染め上げてやろう』と宣戦布告の文書が届きました。」

（国境と防衛線を飛び越えて、直接中央の軍施設に攻撃！？結界も張ってあったはずだし、その全てを越えて魔法を叩き込むなんて荒業をどうやって？）

特級ランク、いや・・・、マスタークラスの魔法使いでも結界を無視して攻撃を叩き込むなど無理だろう。

では、どうやって？スパイがいて、何らかの方法で結界を消したのなら・・・

「軍施設への魔法攻撃は、本当に外部からのみの攻撃なのですか？」

最初から聞かれるとわかっていたようにミズトが答えた。

「はい。国境の結界も、スイエンまで3重に張ってある結界も全て無理やりこじ開けるように破られていました。」

「となると、敵はいつでも中央を攻撃できるぞと、宣戦布告してきたわけですね。」

はつきりいつてとても怖い。

急に日常が遠く感じる。

目に見えないが、いつでも殺せると、命を握られているようだ。

（でも・・・、たぶん私なら、その魔法に対抗できる。自信・・・、ううん。確信かな？）

自分でなければいけないなんて、使命めいたものはないけど、『できる力』は持っている。

何より、やっとなんだステラとの平穏な暮らしを壊されたくない。

戦争になれば日常は簡単に非日常に塗り替えられてしまうだろう。愛国心なんてないし、他人がどうなろうと知ったことじゃないって思っていたけど・・・。

優しい人がいるって、知ってしまったから。

もう、見ないふりなんかできない。

守れる力があるのに、知らないふりはできない。

「私、普通に穏やかに生きていくのが夢なんです。でもこのままじゃ、私の普通が無くなってしまうんですね。レイハートさん？ ウォールさん？ 私でよければ協力させて下さい。私なんですが、何かの役

に立つのなら喜んでお手伝いします。」

グレンが突然頭を下げた。

「ありがとうございます！ありがとうございます！あなたのような少女まで、戦争に駆り出さなければならぬのは正直心苦しいです。ですが、ほとんどの魔法使い部隊は結界の再生と維持で手が離せない状態です。1人でも多くの魔法使いが必要です。本当に協力をお願いします。」

上級魔法使い1人が、兵士何十人分もの役割をこなせるので、戦争は魔法使いの数で決まるとまで言われている。何十、何百もの敵を一瞬で消せるのは魔法使いだけなのだ。

だから、どの国も1人でも多くの魔法使いを確保しておきたくて、魔法使いの養成に力を入れている。

「セラヴィーンさん、国境ではすでに王国直下騎士団が守りを固めています。そこに、今回の依頼を承諾してくれた傭兵達が参加しても数は4000に満たないでしょう。ホムラ軍はおよそ5000、その後に本体の15000が迫っています。非常に厳しい戦いになります。」

・・・遊びではないのだ。

これは現実。非日常が急速に近づく感覚。

「はい、わかりました。一度、家に帰って準備を整えてきます。私はどこに行けばいいですか？」

ステラに説明してこなくちゃ・・・怒られるかな（泣）

「今、国境防衛線と王都の間に防衛戦は1つしかありません。そこが最終防衛線になります。兵を分散させるより1つの壁を分厚くすることに徹底することにしました。ですから、国境をもし越えられた場合は、最終防衛線で必ず押し留めなければいけないのです。現在は、多重結界で何重にも囲い、防衛線の強化に努めています。我々も、防衛線に向かい戦いの準備をします。セラヴィーンさんには、我々と同じ最終防衛線で待機していただきたいのです。」

「わかりました。あなたに目印を付けさせていただいてもいいですか？それを目印に転移しますので。後、私の事はヨルと呼んで下さい。敬語も必要ありません。自分よりも年上の人にさん付けされるとなんか申し訳なくって・・・」

はにかみながらそう告げるヨルに、微笑み返しながら、グレンの心は、先ほどから感じる『力』に翻弄され続けていた。

——グレンside

ギルドに近づいてくる、強い魔力に気付いて声をかけたのは偶然だったのだろうか？

出会う必然だったのかもしれない。

出会った魔法使いは、見たこともないほど美しい少女だった。

確かに、ヨルの髪と瞳は大変珍しく、人々が嫌がるのも仕方のない事かもしれない。

人は自分と違うものや、見たことのないものを拒絶するからだ。

だが、今までヨルの顔をしっかりと見た者はいなかったのだろうか？

こんなに美しい女性は見たことがなかった。

みんなヨルを遠巻きにしか見ず、目を合わせようとしないから気付かないのだろう。

手足もスラリと長く、身長も170近くあるのではないだろうか？

王城にいる、白の陛下と並んだら、それは見事な一对の絵のようになると思った。

今まで、陛下のように美しい人間は見たことがなかったが、この少女は、同じかそれ以上だ。

実際、ローブを取って素顔を晒したときも、纏う色の珍しさよりも、彼女の美しさに驚き言葉がでなかったのだ。

そつと拭った彼女の涙が、今までの孤独を思わせ、心が震えた。辛かったのだろう、苦しかったのだろう。

その時、その場にいれば守ってやれたのに、と。

出会ったばかりとか、距離とか、関係なかった。

ただ心が震え、歓喜している。

出会えた、やっと出会えたと体中の細胞が訴えているようだ。

年相応に恋もしてきた、経験もそれなりにある。愛がなんであるか、わかったつもりだった。

でも、今までこんなに心が震えたことはなかった。
こんなに切ないと思ったことはなかった。

話す言葉、声、姿に目が離せない。

これは何だ？守らなければいけないとを感じる。

今わかつているのは、心が彼女を求めて叫んでいる。
共にいたいと。

第5話 『目印と接触』

グレンは、身の内では荒れ狂うヨルに対する未知の引力に引きずられながらも、表面上は穏やかに会話を続けていた。

「では、ヨルさんと呼びます。敬語は・・・なるべく善処します。我々もグレンとミズトでいいですよ。ところで、目印とはどのようなものですか？」

目印に転移するとは、何か目立つものを持っていればいいのだろうか？

「はい。私の魔力を魔方陣に写し、それをレイ・・・グ、グレンさんの体のどこかに刻ませていただきたいのですが・・・。」

（やっぱり、体に直接触れられ、魔法陣を刻むなんて気持ち悪いかな・・・。）

不吉だと言われてきた為、人と人の触れ合いはお母さん意外の人としたことが無かった。

周りの人は、私と目が合うことも、近づくことも嫌がる事が多いからだ。

今現在、狭い個室に2人の騎士と一緒にいて、手を伸ばせば触られる程の距離にいるのが信じられないくらいだ。

「体に？いいですよ。どこに刻みますか？」

啞然としてしまった。

なぜ、この人は私を嫌がらないのだろうか？

なぜ、この人は私を真つ直ぐ見つめるのだろうか？

口をぽかんとあけたまま固まっている私を見て、ミズトが堪え切れず笑い出した。

「だから言っただでしょう？この人は天然なんです。真面目に考えるだけ馬鹿らしくなりますから」

ミズトの発言に、グレンはムツとして反論する。

「おいおい、それじゃあ俺が馬鹿みたいじゃないか？俺だって色々考えてるんだぞ？」

「色々考えて、『それ』だからいいんです。あなたはそういて下さい。」

（ああ、そうか、この人は・・・この人達は私の事を1人の人間として見てくれているんだ。）

闇を纏う者ではなく、不吉な少女でもなく、ただの少女『ヨル』として見てくれているのだ。

「ありがとうございます。私の事、『私』として見てくれる人なんて、ほっといかなかったから、凄く嬉しい。」

ほんのりと頬を染めて笑うヨルはとても綺麗で可愛かった。

- - - - -

「目印はどこでも大丈夫です。直径3センチぐらいの魔方陣が刻まれるので、見えないほうがいいなら腕や、肩でもいいですよ?」

「それなら、手の甲でいいですか?わざわざ服を脱ぐよりいいですよ?」

その言葉にヨルはにっこりと微笑み頷くと、右手の人差し指を立て、先端に魔力を集め形成していく。

要は自分の匂いをつけるのだ。

どんなに遠くにいてもその目印に転移できるが、生き物以外に刻めないのが難点だ。

魔力を刻む器の生命力に反応して、魔方陣は維持される。当然、生命反応が無くなれば消えてしまう。

ヨルの指先に直径3センチ程の闇色の魔方陣が完成し、指先の少し上をクルクル回っている。

「準備ができました。手の甲を出して下さい。」

グレンは言われるままに、右手の甲を差し出した。

ヨルは、グレンの手を左手でそっと受け取り、指先で回ってる魔法陣を甲に押し当てた。

グレンの体が一瞬、ビクッと揺らぐ。

「つつ!」

グレンの反応に驚いたヨルは混乱した。

一度受け入れられれば、今度は拒絶されることがたまらなく怖い。
「っ！すみません！熱いですか？痛みはないはずなんですけど、痛かったなら、ごめんなさい」

どうしたらいいかわからず、まくし立てるように喋るヨルに、グレンは少し慌てた。

「！大丈夫です！熱いというより・・・暖かいです。ただ、予想外だったので、思わず体が反応してしまいました。申し訳ない」

「そんなっ！あやまらないで下さい！先に、少し熱いかもと説明しなかった私が悪いんです。こちらの配慮がたりませんでした。本当にごめんなさい・・・」

印を刻む手を止めず、グレンの手をうつむき加減で見つめながら作業を続けていたヨルだが、その手がかすかに震えていることにグレンは気付いた。

グレンはそんなヨルを見て、胸が締め付けられるような思いがしていた。

ヨルは、人との距離感や接し方がわからないのだ。

何かあった時、どうしたらいいかわからないから、過剰に反応して、自分が悪いと言って謝ってしまうのだろう。

悪いのは全部自分なのだと、そう思っているのかもしれない。

こちらが、もっと碎けて接しないと、この少女には伝わらない。どんなに大丈夫だと言っても伝わらないのだ。

本当は、抱きしめて、大丈夫だよと、安心させてやりたいが、ここにはミズトもいるし、もしそんなことを今したら、余計にパニックになりかねない。

グレンは肩の力を抜き、優しく喋りかけた。

「こんなことで、そんなに気にしないでいいから。大丈夫だよ。これで、目印完了かい？」

グレンが突然、喋り方を変えたことにミストはすぐに気付いたが、ヨルが気付いた様子はない。

いくら、慣れてきても、初めて会った人間にまだ緊張しているのだろう。

いちいち喋り方にまで気を配る余裕がヨルにあるとは思えなかった。

ヨル自身は、グレンが先ほどの事を気にした様子が無かったので、ホッとしていた。

「はい。完了です。これでいつでもあなたの元へ転移できます。」

そう言うてにつこり笑うヨルに、この子こそ、天然だと2人は思ったとか。

- - - - -

ヨルが立ち上がると、2人も続いて立ち上がる。

「それでは、私はギルドに少し用があるので、用事を済ませたら、家に帰り準備します。そうですね・・・夕刻にはそちらに向かえると思います」

「了解！俺たちも、昼過ぎには防衛線に到着しているから、大丈夫だ。協力感謝する」

そういうと、2人は騎士の礼で見送ってくれた。

（私のほかにも、何人かに声をかけてスカウトするのかな？それにしてもなんだろう？胸がドキドキしてるし、顔が熱い……。）

今まで、生きることと精一杯だったヨルは、母の愛は知っていても、異性との『恋』や『愛』は知らない。

そのドキドキがなんなのかわからないのだ。

まだ、恋とも言えないぐらいの小さな小さな欠片だが、確実にソレはヨルに変化をもたらすだろう。

（まあいいや！早く、報酬もらって、ステラに話さなくっちゃ！もう町長の依頼とか言ってられないし）

ヨルは胸のドキドキをそれ以上追求せず、さっさとわずかな報酬をGETして家に転移した。

余談ではあるが、町長からの斜面の強化依頼は、クエストボードにずっつと貼られっぱなしだったとか……。 （あわれ町長……）

「ただいま。ステラいる？」

玄関に転移したヨルは周りをキョロキョロしながらステラを探す。

「おかえり、ヨル。」

ステラは、暖炉の横に寝そべっていた。

ヨルは、先ほどの事を話す為にステラの横に座ることにした。

「聞いて、ステラ！あのねっ・・・」

「全部見て聞いてたからわかってる。ヨルのしたいことも、しようとしてることも。」

同意の契約は魂の契約。その気になれば、相手にリンクして動向を見ることも、会話を聞くこともできる。

いつもは勝手にリンクなどしないのだが、今回はヨルの強い感情の揺れを感じたステラが心配して、リンクしたところ、あの紅^{あか}の騎士と対面してる所だった。

「ヨルのしたいようにすればいいとおもっただし、私も行くから。」

（私の大事なヨルをつ！みすみす、あんな赤毛に手出しさせるもんですか！）

「えっ？ステラも行くの？どうやって？ステラみたいに大きい魔獣が行けば、みんなビックリするよ？」

「大丈夫、さすがにこのまま行く気はないわ。子犬にでも変化して行けば邪魔にはならないでしょ？」

まだまだ、世間知らずのヨルを一人で戦場に送るなんてステラには考えられなかった。

何かあった時に近くにいたほうが、守りやすい。

「ヨルは、私の事を使い魔って紹介すればいいでしょ？魔法使いなら魔獣の使い魔くらいいてもおかしくないんだから。」

最前線ではないとはいえ、戦場に行くことに不安がないわけではない。

守りたいという気持ちに嘘はないが、人を傷つける事にはためらいがある。

だから、ステラが共にいてくれるのは正直心強い。

「ありがとう、ステラ。ステラはいつも私の事守ってくれるね。私もステラの事守るから、一緒に行こう」

しばらく家をあけるかもしれないので、いろいろ準備をしなくてはいけない。

部屋の片付けや、腐りやすい食べ物を調理しながら、ステラにグレンさんとミズトさんの話をした。

「見てたなら知ってるかも知れないけど、あの2人・・・とくにグレンさん！私の事見ても嫌な顔ひとつせず、真っ直ぐにこっち見て会話してくれたよ！凄いよね！やっぱり暖かい人もいるんだね。凄く嬉しかった！あとね、ミズトさん！あんなに色が混ざった人初めてみたよ！多色の人は珍しいし、体が弱い事が多いって学校で習ったけど、ミズトさんは騎士になるぐらいだし強いのよね！」

ギルドであった事を、若干興奮しながら話すヨルに、ステラはやれやれとため息をついた。

（人の温かさに触れて、嬉しかったのね。こんなにはしゃぐヨル、初めて見たわ。）

「それでねっ！グレンさんが・・・」

「はいはい、わかったから手を動かす！さっきから全然進んでないわよ。口よりも手を動かしなさい！じゃないと遅くなるわよ？」

ヨルは、ハツとして壁にかかっている時計を見た。

「！！！！ほんとだ！もうあんまり時間ない！家全体に保護の結界と維持の魔法かけていこうかな・・・でも食べ物、食べるなり、処分するなりしないと駄目だよね？」

「転移すればいつでも戻ってこれるんだから、そのままでもいいんじゃない？」

ヨルは、言われて初めて思い出したように、ハツとした。

「そうじゃん！でも、本当に戦いが始まったら、結界の維持で身動きできなくなっちゃうし・・・。やっぱり、食べ物はなるべく処理していこう！」

「5日後には、今展開してる国境の軍とホムラ軍が衝突するのよね？でも、中央に直接攻撃ができる魔法使いがいるなら、正攻法でくるかしら？」

懸念すべきはそこだ。

最初の力業以来、魔法で攻撃してこないのだ。長距離で魔法攻撃が出来るなら、進行の手助けになるはずなのに。

「うん。魔法といっても万能じゃないし、最初は国内の混乱と戦力を削ぐ為に必要だったかもしれないけど、今は進行してきてるわけだし・・・、わざわざ遠距離で魔法攻撃しなくてもいいんじゃないのかな？遠距離の魔法は魔力の放出も多いし、固定も難しいから・・・。うん？」

作業の手を本格的に止めて、うんうんと考え出したヨルに、ステラはただただ嘆息するのみだった。

第6話 『魔女と子犬』

「グレン団長！！国境防衛線の兵の配置、結界の強化はほぼ整ったと連絡がきました。ですが、こちらの準備がかなり遅れています」

グレンとミズトが最終防衛線に転移魔方陣で到着した時には、だいぶ日も落ちてきた頃だった。

転移すると、すぐに気付いた部下が駆け寄ってきた。

「当初より強行軍なんだ仕方ない。時間がないからって慌てすぎるなよ。迅速、丁寧、確実に準備を進めろ」

「はい、了解です！それと、やはり魔法使いの数がかなり足りません。国境防衛線の結界維持と攻撃部隊でかなりの数をあちらに配備しているのと、王国を守る為に王城に残ってきているので、こちらの防衛線に配備する人数を確保できませんでした。いっそのこと下級ランクの魔法使いも集めますか？」

「いや、下級の魔法使いなど、いくら集めても足しになるまい。何人か中級の魔法使いに声をかけたから、今日中には来てくれるはずだ、あと、上級の魔法使いも1人夕刻に到着予定だ。あとは、各都市にスカウトしに行った奴らの結果次第だな」

陣営の奥にある、ひときわ大きな天幕に向かって歩きながら、部下と打ち合わせをしているが、グレンの心は今日会ったヨルの事が気になって仕方がなかった。

話しながら、チラリと右手の甲に刻まれた『目印』に目を落とす。
触れられた手の、暖かな温もりが忘れられない。

王国が危機的状況なのに、こんな事を考えているべきではないと
わかっているが、グレンの心にはヨルの存在がしっかりと刻まれて
しまったようだ。

もっと近づきたい。触れたい。あの美しい瞳を覗き込みたい。

あの時そんな欲望が、確かにあった。

そんなグレンの後を、ミズトは何も言わずついて歩く。

ミズトは、グレンの感情の揺れを感じ取っているようだった。

（これも、一種の運命さだめとでも言うのでしょうか……。確かに、
あのとき団長とヨルさんにはお互いを引き付ける強い引力のような
物を感じました。出会うべくして出会ったような……。）

不思議な空気を纏った、美しいヨル。

なぜ、他の人はあの人を畏怖したり、奇異の目で見るのか……。

美しい人は世の中に沢山いるし、それこそ王城やスイエンの貴族
街に行けば美しく着飾った女性は沢山いる。

だが、ヨルの美しさはそうだった、外見の美しさだけでは違う。
まるで夜の闇のような安らかな静寂の中で、優しく包み込んでく
れるような空気を纏っている。

纏っている空気が美しい。存在が優しい。

（きっと、幼い頃から沢山の苦勞をしてたはずです。それでも、
人を信じる事を恐れずに、あれだけ純粋なのは、愛してくれる人が
いるのでしょうか）

ミストが思案に耽っている間に、いつの間にか指令所になっている大きな天幕に着いていた。
グレンは天幕の前にいた分団長達に、細かな指示を出しているところだった。

「魔法使いの穴は我々で埋めるしかない。兵達に結界の魔石を持たせておいてくれ。国境の軍は4騎士の1人、蒼の騎士シアン団長が指揮しているが、どれほど足止めができるかはわからん。兵の余力があるうちにここまで下がってこられればいいが・・・、とにかく！4日以内に準備を終わらせれるように頑張ってくれ！」

王国直下騎士団は『騎士団総長 銀の騎士』ソウルを頂点にして、下に4つの騎士団がある。

『蒼の騎士団長』シアン
『紅の騎士団長』グレン
『翠の騎士団長』ヒスイ
『琥珀の騎士団長』キンサ

が、それぞれ指揮している。

騎士団とは、家柄よりも強い運命さだめを持って生まれたり、濃い色や、特別な色を持つ者が優遇される。

青より蒼、赤より紅、緑より翠、茶より琥珀、といったようにだ。本来、運命さだめの女神による言霊は、あいまいなものが多い。生まれた瞬間に、将来就く職業が決まっているような者は滅多にいない。人生とは自分で選び、歩んで行くものだからだ。

しかし、その滅多にいない特別な運命さだめや、色を持って生まれた者は何故か、常人より強い力を持っている。

そういった者は、魔法学校や騎士養成学校などの、専門学校に無

償で通えるのだ。

もちろん授業料さえ払えば、誰でも通える。

ミズトは、あいまいな運命さだめとあいまいな色を持って生まれた自分が、好きではなかった。

どんなに頑張っている、『ミックス』のくせにと陰口を叩かれる。

できても、できなくても、駄目だと・・・

生きて行くこと自体を否定されているように感じていた。

そう・・・、グレンに会うまでは。

（あのときグレン団長に会わなければ、生きている意味を見出せなかったな・・・。）

気がつくと、分団長達との打ち合わせが終わったグレンがこちらを向いていた。

「どうした？ミズト。なにか考え事か？難しい顔してるぞ」

「いいえ。少し昔を思い出していただけです。それよりも、いいかげん中に入って、スカウトしてきた魔法使い達が来る前に、おおよその配置を決めておきましょう。」

そういつてミズトとグレンは指令所となっている天幕に入っていた。

「さて、片付けはこんなものでいいかな？後は結界を強化しておけば準備万端だよね！」

予定より少し遅くなってしまったが、家の片付けと遠征の準備をあらかた終えたヨルは、最後の仕上げに家を守る結界を強化した。

「ふう、完了です！ステラ？ステラ？準備できたからそろそろ行こうか？」

さっきまで横にいたのに、いつの間にかステラがいなくなっていた。

きよろきよろといっていると、下の方からステラの声が聞こえてきた。

「ここにいるわよ！下、下！」

声のする方に視線を向けてみると、足元に小さな銀色の子犬がおり座りしていた。

子犬を見て固まるヨル。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ヨル？どうしたの？私も準備できたからいつでも・・・」

「カワイイ~~~~~！！！！なにこれ？なにこれ？ふわふわだよ！！小さい~~~~！！！！」

突然のヨルのテンションMAX状態に、思わず後ずさろうとしたステラだったが、ヨルがヒョイと抱き上げてしまったため、それはかなわなかった。

頬ずりしたり、抱きしめたりして撫で回しているヨルの手をなん

とか掻い潜り、床に飛び降りたステラは若干低めの声で訊ねた。

「ヨル・・・私達、遊びに行くわけじゃあ、ないのよね？」

「うっ・・・！」

ステラの怒りのこもったドス声に、ヨルは素直にごめんなさいと謝るしかなかった。（凄く怖かった（泣）byヨル）

気を取り直していよいよ出発だと、ヨルは荷物をまとめたリュックを背負った。

「さ、さて！ステラ、そろそろ行こうか？」

いまだに、白い目でヨルを見つめていたステラは、やれやれとため息を吐きながらヨルの肩によじ登った。

（子犬が溜息って・・・。似合わないし。そもそもあの姿であの喋りって・・・まあいいや。深く考えちゃ駄目だね、うん。）

「いいことヨル？いきなり紅の騎士の^{あか}前に轉移したら駄目よ？入浴中だったり、取り込み中だったりしたら困るでしょ？だから、轉移ポイントを少しずらして轉移するのよ？」

ヨルはステラのアドバイスに、もったもたと思い、少しずらした場所に轉移することにした。

目を瞑り自分の刻んだ魔方陣の気配を探るヨル。

すぐに魔方陣の気配をつかんだヨルは、轉移到着ポイントを10メートル程ずらして轉移した。

（もういちど、あの人に会えるんだ・・・）

あの人を思い出すと、高鳴る鼓動の意味を『まだ』知らない・・・

第7話 『金と闇』

ヨルとステラが転移した場所は本部になっている天幕の、10メートル程離れた場所で、小さな天幕が沢山並んでいる場所だった。日も沈んだというのに、魔法で灯された明かりの下を、人々が忙しなく行き来している。

いつものように目立たないようロープを目深にかぶり、人々の邪魔にならないように端を歩いて、魔方阵の気配を手繰る。

「うーん。もう少し奥だね。ちょっと距離を離しすぎたかな？ あっ！奥に大きな天幕が見えるね、あそこかな？」

歩きながら、さつきから気になって仕方なかったことを、ステラに尋ねてみた。

「あのさ、ステラ。」

「何？」

「なんかね・・・この結界って、穴だらけじゃない？ ツギハギとゆうか・・・。なんだろう？」

「魔法使いが足りないから、兵や騎士たちに結界の魔石でも持たせているんじゃない？」

「ああっ！うん。そんな感じ！まとまりの無い感じ、個々の守りなんだ！でもこれじゃ、あっという間に破られちゃうね」

「そのためにヨルや他の魔法使い達がここに派遣されたんでしょ？」

「うん！頑張る！」

喋りながら歩いていたら、あっという間に大きな天幕の前に着いていた。

入り口には2人の兵士が立っている。

声をかけるか一瞬迷ったが、ちゃんと到着の挨拶はするべきとゆうことで、見張りの兵の人に話しかけた。

頼まれてきたのだから堂々としていればいいとステラが心で伝えてきた。

やはり、ステラがいてくれると心強い。

「あの、グ、いえ、紅^{あか}の騎士のグレンさんにスカウトされた魔法使いですけど・・・」

そついうと2人は一度顔を見合わせ、再びヨルに視線を合わせた。

「！ああっ！ヨル・セラス・セラヴィーンさんですね？グレン団長から聞いています。今、会議中ですので、緊急の取次ぎ以外はできません。少しお待ちいただけますか？もうすぐ終わる頃ですから」

グレンは見張りの兵にヨルのことを伝えてあったらしい。

怪しまれることも無かった為、ヨルはグレンの心遣いに感謝した。

「フン！よく気の回る男ね！」

「私が、人に慣れてないのをわかってきてくれるんだよ。優しい方だよね」

「！！！！ッ！？」

ステラと一緒に、他愛も無い話をしながら時間を潰していたら、突然上空からとてつもなく巨大な魔力を感じた。

肌が粟立ち、息が苦しくなる程の、高魔力だ。

ヨルとステラは慌てて空を仰ぎ見た。

「！！あれはッ！？」

空一面に巨大な金色の魔法陣が転移してきている。圧倒的な質量で、すでにこちらの結界が押しつぶされそうだ。

（金色の魔方陣？でも！この異常な魔力放出量はなに？このまま攻撃されれば、結界なんか簡単に吹き飛ばされて、ここが蒸発してしまう！）

考えている時間はない。止めなければみんな死ぬ。

答えは簡単だ。止めれる力があるのだから、迷うまでもない。

「ステラは危ないから離れててね」

ヨルはステラにニツコリと笑いかけると、金色の魔法陣に視線を戻し、自らの魔力を解放した。

辺りが一瞬で騒然となった。天幕で会議中だった騎士団幹部たちも高魔力を察知し外に飛び出してきた。

上を仰ぎ見るなり、部下達に指示を出す為に四方に走っていく。

グレンも天幕を飛び出し、上空を見る。

夜の闇に浮かぶ、あまりにも巨大な金の魔方陣。とてつもない魔力を感じる。

「結界を最大に強めろ！高魔力の余波で、こちらの結界が消し飛ぶぞ！！ミスト！国境のシアンと、王城のヒスイに連絡を取れ！」

グレンが全てを言い切る前にミストは走りだしていた。

（なんだ、あれは！？国境からはなんの連絡もきていない。国境の結界を飛び越えて、ここに直接攻撃か！？クソッ！まだ、魔法使い達も全員到着していない、持ちこたえられるか！？）

その時、天幕から2メートル程離れた場所から、突如強い魔力が溢れだした。

「今度はなんだ！？」

闇の中、目を凝らして見ると、今日の朝スカウトしたヨルが、上空を睨み付けながら、魔力を練っている。

「ヨ、ヨルさん!？」

グレンは驚いた。すでに到着していた事ではなく、ヨルの練っている魔力の大きさに驚いたのだ。

ヨルは、金の魔方陣から飛び出してくるだろう攻撃魔法を結界で遮断するのではなく、攻撃されるまえに、金の魔方陣を自らの魔力で包み、相手に還そうとしていた。少しでもリスクを減らす為に。

驚いたままヨルを見つめていたグレンは、突然下の方から声をかけられた。

「大丈夫よ。今は夜。ヨルに敵うものなどいないわ」

視線を足元に向けると、いつのまにか小さな銀色の子犬が、闇色の瞳でこちらを見上げていた。

「き、君は?」

「私はヨルの使い魔のステラ。あれだけ強い魔力を放出しているヨルには危なくて近づけないから、非難してきたの」

ヨルの周りの大地が、放出される魔力に耐え切れず、亀裂を走らせる。

纏っていたローブも、強い風に煽られるように吹き飛び、おしみなく闇色の髪を晒していた。

それを気にすることもなく、ただ上空を見つめ続けて魔法を展開していく。

ヨルを中心にした、凄まじい魔力の嵐。

思いは力に、意志は魔法に。

じわじわと金の魔方陣が闇に侵食されていく。書き換えられ、生み出した相手に送り還す為に。

しばらくすると、金の魔方陣が完全に闇に侵食された。

金の魔方陣からの凄まじい魔力の放出が治まり、辺りはヨルの魔力で包まれ、守られる。

静寂の中、凜とした声が闇に響く。

「反転せよ！そして還りなさい！！」

キーーーーー.....ン.....

ヨルが言葉を発したと同時に、辺りに耳鳴りのような高い音が響き渡り、人々の鼓膜を振るわせた。

ヨルの纏っていた嵐が解け、辺りが静寂に包まれる。

上空にはもう何もなかった。

どれくらいか、誰も動けなかった。

あまりのことに、グレンも周りにいる騎士達も、ただただヨルを見つめる事しかできない。

ただわかつているのは、この闇を纏った少女が自分達を守ってくれたということだ。

グレンがヨルに歩み寄ろうとしたとき、ヨルの体がグラリと傾いだ。

そのままゆっくりと後に倒れていくヨルを、グレンは慌てて駆け寄り、抱きとめる。

どうやら、気を失っているようだ。

ステラはその様子を見ながら、グレンにだけ聞こえるように話しかけた。

（ヨルをあまり目立たせたくないの。どこかで休ませてあげられる？意識はないけど大丈夫。大きな力を使った反動で、魔力を回復する為に体が休眠状態になっただけだから。1時間もすれば起きるわ。ここの結界もヨルがしっかり強化して固定してあるから、しばらくは大丈夫よ）

グレンはステラの言葉に小さく頷くと、そっとヨルを抱きかかえ立ち上がった。

「各分団長に状況を報告させる。国境の方も状況がわかり次第私に報告を！私は自分の天幕に戻って、彼女を休ませる。報告はそちらで聞く！以上だ」

それだけ言うとグレンは、闇色の少女を抱え、銀色の子犬を伴い歩いていってしまった。

グレンの姿が見えなくなると、年若い兵士や騎士が興奮を抑えられないというふうに騒ぎ出した。

「すげ〜〜〜！！見たかよ！？あの巨大な魔方陣を還したんだろ？」

「俺、もう駄目かと思った！それにしても、あの闇色の少女は誰だ？いたっけ？」

「俺知ってる！！グレン団長がスカウトしてきた、上級魔法使いだ」

「マジで？あれが上級？マスタークラスじゃないのか？王国勤めじ

やなくて、一般にいるのかよ？もったいねえ〜！」

兵や騎士達が騒がしく話していると、ミズトが戻ってきた。

「グレン団長は？」

「ハッ！団長は、意識を失った魔法使い殿を休ませる為に、ご自分の天幕に戻られました！報告はそちらで聞くと仰っておいででした！」

騎士の報告を聞いて、ミズトも天幕の方に足を向ける。

思い出したように振り返り、いまだ興奮冷めやらぬ兵達に忠告をする。

「あまり、はしゃいでいると後でグレン団長に怒られますよ？程々にして、各自仕事に戻りなさい」

「了解しました！ミズト副団長！」

部下達の声の後を聞きながら、ミズトはグレンの天幕に向かって歩いた。

他とは少しデザインが違う、騎士団長としての自分の天幕に着くと、セットされていた寝具に、ヨルをそつと寝かせた。

かけ布を顎まで引き上げて、顔にかかった髪をのけてやる。

そんなグレンをジーツと見ていたステラは、おもむろに口を開い

た。

「この娘は、守りたいものの為にすぐに無茶をする、今回のようにね。ヨルが力を貸すと決めた以上、邪魔するつもりはないけど・・・泣かせたら許さないから」

ステラの方に視線を移したグレンは、思わず息を呑んだ。
そこには巨大な銀色の魔獣がたたずんでいた。

輝く銀の体に、夜の瞳。

その姿は、魔獣とは思えないほど神々しい。

「なるほど、契約者か・・・。その姿が本当の姿か？」

「そうよ。さすがにこのままで就いていくわけにはいかなかったから、子犬に変化してただけよ。ヨルを守る為に、私はずっと一緒にいるつもりよ。でも、人間社会の中で、あの娘を守る為には、人の力が必要よ。巻き込んだのはあなた。『惹かれたのもあなた』、責任もってヨルを守って頂戴？」

挑むような、闇の瞳。

銀の魔獣には、己の気持ちは筒抜けらしい。

だが、指摘されて心が軽くなった。

そうだ、会ったばかりなのに気のせいだと、自分の気持ちに素直になれなかった。

時間など関係ない。自分は・・・、俺はヨルが好きなのだ。
一目惚れなど、絶対にありえんことだと思ったが・・・。

昏々と眠るヨルを見つめる。

自覚してしまえば、愛しさしか湧かなかった。ただ愛しい。守りたい。

もう、言われなくともわかつている。出逢ってしまった。
体中で細胞が叫んでいたのだ、逢えた喜びに。
愛とか恋とか、そんな言葉では表せられないほどの想い。

「わかつている。全力で守る！」

決意に満ちた、燃えるような紅瞳。あかい

その瞳を受けたステラは、ニヤツと笑うと、ボフンツ！と子犬の
姿に変化した。

「もし、約束を違えれば、その命無いと思え！」

恐ろしい捨て台詞を吐いて、ステラはヨルの眠っている枕元で丸
くなりそのまま眠ってしまった。

（・・・そんな可愛い姿で、そんなこと言われても・・・）

第8話 『一目惚れと自覚』

—— ホムラ国 陣営

「殿下！レン殿下！大丈夫でございますか？」

胸を強く抑え、ゼエゼエと荒い息を繰り返す主君に、従者は不安げに声をかけた。

天幕の寝所で、起き上がることも出来ない状態の主君に、従者は医者を呼ぶべきか逡巡する。

「いい……。明日には、ツツ……。！、回復する……。」

それを察したのか、何とか体を起こし枕にもたれ、大きく息を吐いた。

ビッシヨリと汗が浮かび、豪華な金の髪が額に張り付いていた。美しい顔を痛みに歪めながら、煩わしげに髪をかきあげて、従者を一瞥する。

従者は、いまだ不安げにこちらを見つめていた。

「シュウ……。あれはなんだったのだ？ツツ……。あと……。一息で、無国の防衛線を壊滅できたはずだ。クッ！！ハア……。何がこったのだ？」

息を吸うことさえ辛いのか、何度も息を詰めながら、シュウに訊ねた。

「レン殿下、我々が見たのは・・・闇です。殿下が放出した魔力が
どどん闇に侵食されていくようでした。魔法を受けるでもなく、
消滅させるのでもなく、すべてを塗りつぶしていくような、圧倒的
な闇の魔力でした」

レンの荒い息使いのみが部屋に響きわたる。

「とりあえず、殿下はお休み下さい。4日後には国境です、それま
でに回復しなければ・・・」

「フンツ！ツツ！明日には回復している！ツ！~~~~、それにし
ても、その魔力の持ち主は人間か？」

「我々から見れば、殿下のお力も闇の魔力の持ち主も、十分に人の
枠から外れております。ですが、あちらがあれほど強力な魔法使い
を味方にしたのならば、今後は無闇にお力を跳ばすのはおやめ下さ
い」

従者の言うことはもつともだ、だがこちらに、これほどの反動が
くるのならば、あちらの魔法使いもダメージを負っていないのか？

「・・・シュウ！探りを入れる！このままにはしておけん！」

レンは、強く拳を握り締めながら虚空を睨み続けた。

ミストが団長の天幕に着くと、丁度団長が外に出てきた所だった。

「団長、国境は異常なしです。結界の確認をしてもらいましたが、損傷はないようです。王城の方にも連絡しましたが、異常なしでした。あの攻撃はここを狙ったものですね。ここが、戦いの要と知っているから、真っ先に手を打ってきたのでしょうか？」

ミストの報告を聞き、一先ず胸を撫で下ろした。

これで、国境が破られていたら、大惨事だ。

「おそろくな。今回は、ヨルさんがここに到着していた事と、あの力に対抗できる力を持っていたという偶然が重なった為、奇跡的に難を凌げた。あれほど強大な力をぶつけられれば防ぐことは難しい、もしヨルさんがいなければ、ここは壊滅していただろう・・・。」

グレン団長の言葉にミストが難しい顔をする。

「ですが、これからが大変ですよ？ヨルさんの力はホムラ国にとって脅威になるでしょう。あれほどの攻撃を還されたのですから。ですが、またあのような攻撃があつたら、ヨルさんを頼らざるを得ないですし・・・、ホムラ国も、すぐにでも探りをいれてくるでしょう。」

「ああ、守らなければな。だが彼女は人形ではない。部屋の奥で守られるだけの自分など、受け入れないはずだ。自ら戦う意志でここに来たのだから」

守ることで、隠すことは違う。

彼女にも意志があるのだ。

強い意志を感じたミズトは、グレンの変化に目を見張った。

「あれ！？団長、自覚したんですか？」

「なんだ、その、さも、ありえないという反応は！」

ミズトに指摘されたグレンはまるで、少年のように照れていた。

「いや、以外でした。団長のことから、まだ出会ったばかりだとか、勘違いだとか、気のせいだとかいって気付かないふりしてると思ったんで。あと、いい年した男が照れてる姿はなんか気持ち悪いんでやめてください」

副官の毒舌に、言い返す気力もわかず、大きく息をついた。

「とにかく、これからがたいへんだ。絶対に護らなければいけないんだからな」

「いつその事、団長の横に留めておけばいいんです。結果的にヨルさんの能力はすでに国内外に知れ渡りました。あれほどの力を持つものを隠す必要などありません。堂々と団長の横に置けばいいんですよ。それが牽制になります」

確かに、王城や騎士団の人間達はヨルの纏う色にすぐなれて、彼女にかまうだろう。

今のうちにしっかり牽制しておくと、ミズトは言っている。
余計な虫が付かないように。

「未来の為にも、今を乗り切りましょう」

「ああ」

- - - - -

今後の細かい打ち合わせを済ませ、天幕に戻ったグレンは、いまだ眠るヨルの顔を覗き込んだ。

一瞬、目を開けたステラと目が合ったが、スルーだ。そつと頬に手を滑らせると、くすぐったいのか、わずかに身を揺る。

あるとき抱き上げた体は、とても温かく柔らかかった。思い出すだけで、グレンの胸に暖かい何かが込み上げてくる。

じつとヨルを覗き込んでいると、ヨルの睫がかすかに震え、ゆつくりと目が開いていく。

まだ焦点が定まらないのか、何度か瞬きを繰り返し、夜の瞳を空に彷徨わせている。

だんだん覚醒してきたのか、覗き込んでいたグレンに焦点を合わせると、パチリと目を開きアワアワと暴れたした。

「え？なんで？グレンさん？アレ？？？」

顔を真っ赤にして慌てている姿はとても可愛い。

そんなヨルの瞳を見つめながら、グレンは優しく語りかけた。

「大丈夫、落ち着いて。体は辛くないか？魔法を還した所で意識を失ったんだ。ステラがいうには、魔力を大量消費したために体が休眠状態になったと言っていたが・・・痛いとか、苦しいとかはな

いか？」

ヨルは混乱していた。魔法を還したのは覚えている。その後は記憶がないので、グレンさんが言っている通りなんだろう。

でも、目が覚めたらいきなりグレンのドアップだったのだ。驚いて、心臓がバクバクと煩い。

（ビツ、ビツクリした……。グレンさんの顔ドアップで見ちゃった……。もともと整った顔だなんて思ってたけど、やっぱり凄い格好いい……。ん？ステラ？）

いまだに鳴り止まぬ鼓動を宥めながら、ステラを探せば、自分が寝ていた枕の横で丸まって眠っていた。

「ええ！？ステラと話したんですか？」

信じられないといった顔でグレンとステラを交互に見る。

「ああ、ステラは君を守る栄誉を私に与えてくれたよ。君の力は国内外に広く知られてしまった。悪いことに君を利用しようとする人間がいるかもしれない。だから、人の世界では私が守る。」

信じられないぐらい驚いた。ステラは基本的に私以外の人間と会話をしない。町長相手にもだ。

それを、グレンには簡単に私を託した。

（この人は大丈夫ってことなの？ステラ）

ステラをジッと見つめてみるが、会話に参加する意志はないらし

い。

小さく嘆息しながら、自分の体に違和感がないか確認してみた。

「ありがとうございます、体の方は大丈夫みたいです。倒れてしまつとは思わなくて・・・、ご迷惑をおかけしました」

「いや、礼を言うのは私達だ。ヨルさん、君がいなければここは壊滅していた。ありがとう」

頭を下げて礼を言うグレンにヨルは恐縮してしまった。

自分より年上で、しかも男性に頭を下げられるなど人生初だ。

「とんでもないです！人の役に立てたなら嬉しいです。あと、朝も言いましたけど、私の事はヨルと呼び捨てにして下さい。年上の方から『さん』付けされるのは、ちょっと・・・」

俯き、少し恥ずかしそうに語るヨルに、グレンはニコリ（ニヤリ）と笑った。

「では、ヨルと呼ぶかわりに、私の事もグレンと呼ぶこと！そして、敬語も禁止だ」

「えええ！？」

なんとも言えない顔でグレンを見つめるヨル。
嬉しげにニコニコしているグレン。

「・・・わ・・・わかり、ました」（負けた・・・）

ヨルはガツクリと肩を落とし嘆息した。

少々強引な、グレンの思惑にまんまと引っかかってしまった。

「では、ヨル？これからのことだが、さっきの金の魔方陣を選した結果が、君の力を大勢の人に知られる結果になった。当然ホムラ国からも目を付けられる恐れがある。国内からもヨルの力を利用しようとする輩が現れるかもしれん。なので！しばらく私付きの魔法使いでいてもらう」

瞬きをパチパチと繰返しグレンを見返すヨル。

「え！？それって・・・？」

いまいち状況が理解できていないようだ。
そんなヨルに、グレンは優しく言った。

「守る為に傍にいて欲しいんだ。そして、私たちの事を守って欲しい。ヨル、君の力が必要だ」

第9話 『グレンとヨル時々ステラ』

なんでこの人は・・・、グレンはいつもヨルの欲しい言葉をくれるんだろう。

（やばい・・・涙出そう・・・）

守ってくれる、必要としてくれる。

『私』を必要としてくれる。

「・・・はい。これからよろしくお願いしま・・・『ボソッ』敬語」
「／／／／／、うん。これから、よろしく。／／／／／（照）」

真っ赤になって俯いてしまったヨルをグレンは愛しげに見つめる。

（真っ赤になって可愛いな・・・）

照れが治まったのか、顔を上げたヨルは、今の状況の説明をグレンに求めた。

「あの巨大な金色の転移魔方陣が消えた後、どうなりま・・・どうなった？何か変化はあった？／／／／／」

まだ、照れはあるものの、なんとか普通に喋る。

「いや、現状はヨル・・・君のおかげで被害はない。城も国境も被害なしだ。ただ、今後あれ程の力が転移してきた場合、私達に防げるかはわからない・・・」

「あつ！それなら大丈夫！」

ニツコリと自信満々に言うヨル。

「魔方阵を還すとき、相手の意思を少し感じたの。相手は1人だよ。しかも、あれだけ巨大な力を還されたんだから、今は起き上がることも出来ないんじゃないかな？」

グレンはわずかに目を見開いた。

「相手が1人とわかるのか？」

「はい、あ、うん。あの魔方阵を還すときに少し探ってみたんだけど、あれには1人の意志しか感じられなかった。凄い人だよ？あの巨大な魔方阵を維持して転移させるなんてマスターランクどころじゃないよ。きつと、あの人も運命さだめに選ばれた人なんだ・・・」

あの時、確かに感じた向こう側の・・・『金の意志』。

消滅させるよりも、少しでも向こう側を探る為に、あえて塗り替えて還した。

慎重に魔方阵を侵食しながら、向こう側に意識を集中して相手を伺う。

見えてきたのは目が眩むほどの『黄金』。

「次に攻撃してくるとしても、あれだけ強い魔力なら、発動前に私が入ります。かならず、発動前に阻止します。」

強い決意を瞳に宿し、グレンをじっと見つめるヨル。

「ああ、よろしく頼む。いずれ、ここは前線になる。戦いが始まったら必ず私の側か、ミズトの側にいてくれ。」

グレンはヨルの瞳を見返しながら、これでよかったのかと急に不安になった。

本当は、こんな戦いの場に置いておきたくない。安全な場所で大事に守りたい。

だが、ヨルほど強い魔法使いはここにはいない。

あの、金の魔方阵に対抗できるのは、現状ヨルのみだ。

グレンの葛藤にヨルは気付かない。

「はいッ!! 任せて下さい!!」

「ヨル、敬語。」

「あっ・・・(汗)」

今後の予定を話し合っているうちに夜も更けてきた。

そんな時、グレンを呼びにミズトが天幕にやってきた。

グレンの寝床をステラと共に占拠していたヨルは、あわてて魔法使い達に割り当てられているはずの天幕に移動する旨を伝えると、2人から即却下された。

今のヨルは誰に狙われるかわからないので、今日はそのままここで休めと言われた。

紅^{あか}の騎士団長グレンの天幕に、おいそれと忍び込む輩もいないだろうということだ。

しかし、それではグレンが休む場所は？とヨルが問えば、グレンも護衛としてここで寝ると言う。

グレンの言葉に一瞬ステラが目覚まし、グレンをジッと見つめたが、何を言うでもなく再び眠ってしまった。

結局、ステラの許可（？）を得て、ここにいる間はグレンの天幕で寝泊りすることになってしまった。

グレンが打ち合わせの為にミストと共に天幕から出て行くと、ステラが目覚ました。

いや、目を開けたと言うべきか・・・

「！！今頃、目を覚ましてっ！！どうせずっと起きて聞いていたんでしょ！？」

ヨルの拗ねた物言いに、ステラは実にいやらしい顔で笑った。

「だって、2人の邪魔しちや悪いじゃない？それにヨルだって、グレンのこと気になっていたみたいだし、いいじゃない。人の世界では人の味方もいたほうがいいわ。外の世界はヨルを利用しよとする馬鹿がたっくくさんいるのよ？そんなところで、おのぼりさんのごとくウロウロチョロチョロしてたら、あっという間に攫われて、戦争に利用されて使えなくなったらポイよ？」

ヨルの為だったと言われれば、何も言い返すことはできない。

「でも、今日会ったばかりなのに、なんでこんなに気になるんだろ・

・それに胸がドキドキするの」

「時間じゃないのよ。心が反応したなら、それは運命さだめが導いているのかもしれない。2人は出会うべくして出会ったのかもね。グレンのことが気になるなら、知る努力をしなさい？ヨルはこっち関係は経験が足りなさ過ぎるんだから」

（知る努力か・・・グレンさん・・・グ、グレンの・・・ああ！駄目だ、なんか照れる／＼／＼名前呼ぶだけで恥ずかしい気がするのは何でだろう？）

ヨルが脳内で勝手に照れていると、外から喋り声が聞こえてきた。どうやらグレンが帰ってきたらしい。

寝所の仕切り布の前でグレンがヨルに声をかけた。

「ヨル？まだ起きているなら、少しいいか？」

まだドキドキは治まらないが、あまり待たせてはと思い、すぐに大丈夫だと伝えた。

そつとヨルの側まできたグレンは、ヨルの横にチョコンとお座りしてこちらを見ているステラに気付いた。

「ステラと話していたのか？」

「はいじゃなくて、うん。ステラはスツゴイ人見知りなのに、グ、グレン／＼／＼、と話をしたって聞いたから、私ビックリしました。じゃなくて、ビックリした。」

頬を赤く染めながら、一生懸命普通に喋ろうとしているヨルを見

てグレンは固まった。

（なんだこの可愛い生き物は！我慢しろ俺！ステラもいる！）

脳内で葛藤しているグレンは、表面上は穏やかにヨルの話を聞いていたが、しばらく毎日一緒にいるのに大丈夫か俺？と自問を続けていた。

「と、とりあえず今日はもう寝ること！夜に戦争は起こらないなんていう常識はないから、休めるうちに休んでおくこと！私は隣にいるから何かあれば呼んでくれ」

「うん。明日はいつ頃起きる？」

首を傾げながら聞いてくるヨルに、グレンは更なる精神ダメージを負った！！（笑）

「・・・起きる時間に外で鐘が鳴るからすぐに気付くよ。その後は起きた後で説明しよう。おやすみヨル」

「おやすみなさい、グレン」

寢所から出て行くグレンに微笑みながら挨拶を返した。

すぐには眠れないと思っていたが、寢床に潜り込むと一気に眠りに引き込まれていく。

「きつと朝早いんだろうね・・・ステラ、おやすみ・・・」

「おやすみ、ヨル」

ヨルが眠ったことを確認したステラは、子犬の姿から本来の姿に戻り、ヨルを守るように自分の体で包み込んだ。

「何があっても私はヨルの味方だから・・・思うように生きてね。」

ステラはヨルと揃いの瞳に深い慈愛を滲ませながら、今度こそ眠りについた。

グレンは大きな精神ダメージを受けた結果、同じ天幕にいるヨルのことが気になりすぎて、ほとんど眠れなかったとか・・・。

第10話 『戦場の足音』

グレンと行動を共にするようになり3日たった。

初日は倒れてしまい、グレンとミズトとしか会話できなかったが、翌朝には幹部会議に連れて行かれ、騎士団の方達に紹介してくれた。私が金の魔方阵を還した魔法使いだと知ると、みんなにとっても感謝された。

騎士団の方々は、見た目の珍しさより実力主義の人ばかりで、『ヨル』をすんなりと受け入れてくれた。異色に悩んでいた自分がチョッピリ馬鹿らしくなってしまったのはここだけの話だ。

^{あか}紅の騎士団はグレンの気質が強く出ているらしい。

ヨルのことを受け入れてくれて、普通に会話してくれる。

おはようと挨拶をすれば、おはようと返してくれる。そんな当たり前のことがたまらなく嬉しく、テンションが上がったヨルが、よくステラを抱きしめ振り回していた。

ステラにとってはいい迷惑だったが・・・

それから、ちょっとしたグレンのお手伝いをしたり、魔法使いとして結界の綻びを修復したり強化したり、魔力感知の結界を追加したりして1日を過ごした。

夜になるとグレンの天幕で、ホムラ陣営の様子を伺うなどの協力もした。

ステラが本来の姿に戻りホムラ陣営まで駆けて行き、その様子を

ステラの瞳を通じてヨルが見る。

更にその視覚を、魔法でグレンにも繋げて見せたりした。

時間が少しでもあけば、グレンとたくさんお喋りした。

ステラに言われた通り、ヨルなりの知る努力だ。

お互いの事を喋り、グレンの年齢が25歳だと知った。凄く落ち着いていたのもっと年上だと思っていたと素直に告げてみれば、よく言われると少し肩を落としていた。

騎士団の人達に向ける顔とは違う、リラックスしたグレンの顔は年相応に見えると言うと、嬉しそうに笑ってくれた。

私の年を聞かれ18歳だと答えると、20歳を越えていると思っていたと言われ・・・なんとなく落ち込んでいると、グレンが少し慌てて「ヨルはとても綺麗な顔をしているし、雰囲気も穏やかだったから落ち着いた、大人の女性に見えた」と教えてくれた。素直に嬉しかった。

普通に喋ることも自然に出来るようになったし、気付けばグレンも自分の事を私ではなく俺と言う様になっていた。

なんとなく気になって問いかけてみれば、本人も気付かぬうちに素が出ていたらしい。

嬉しかったのでそのままでもいいと言うと、グレンも嬉しそうだった。

そして、ヨルがグレンと共に行動するようになって4日目の朝、ついに国境からホームラ陣営を目視で確認と連絡がきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヨルはステラと共に、見渡しのいい高台にきていた。
そこからジツと国境のある方向を無言で見つめる。

目で国境の軍が見えるわけではないが、目では見えない様々な魔力を感知していた。

その中にひとときわ輝く金の魔力を見つけた。

「金色・・・・。」

本来の姿に戻りヨルに寄り添っていたステラは、ヨルの感知している魔力を共感していた。

ヨルを通して感じる、あまりにも見事な金の魔力に思わず言葉が洩れる。

「うん。すごい鮮やかな『色』だね。今の所、脅威になるのはあの『金色』の魔法使いだけだよ。ホムラ軍の魔法使い達は、こちらの魔法使い部隊に任せて、私はあの金色に集中していればいいってグレンが言ってた。」

というより、金色の魔法使いの相手はヨルにしかできないから、頼むと言われた。

ヨルは、真剣な目をしたグレンに言われたことを思い出していた。

「ヨル、無理はするな、駄目だと思ったらすぐに引くんだ。自分の安全を第一に考える。ヨルが傷つけばとても心配するし、悲しむ奴らがいることを忘れるな。もちろん俺も悲しい。危険だと判断した

「俺のところにすぐ転移するんだ、いいね？」

やけに真剣な目で覗き込まれて、ヨルに無理はするなと諭したグレン。

すぐに無茶をしてしまうヨルの事をステラから聞いたのかも知れない。

心配はかけたくないし、悲しませたいわけでもないけど、できることはやりたい。

難しい顔で思案しているヨルにステラは、頭を低くしヨルの手に頭を擦り付けた。

「ヨル？わかってるよね？魔法は意思。思いは力。ヨルは無敵よ？」

夜の瞳でヨルをじっと見つめてくるステラは、いつもとなんら変わらない様子だ。

そんなステラを見て、少し肩の力が抜けた。どうやら緊張していたらしい。

「ありがと、ステラ・・・うん、落ち着いた。グレンもミズトさんも他の騎士団の人たちも頑張ってる、私も頑張るよ！」

ホムラ陣営

「レン殿下、準備が整いました。いつでも攻撃できます。現在は両

国共に川を挟んだ状態で睨み合っています。」

魔方阵の返還事件から4日、いまだに体に倦怠感が残るものほぼ回復したといえるレンは、対岸に展開されている無国の陣営を鋭く見つめていた。

「あの、闇の魔法使いはここにきているのでしょうか？」

シュウは、じつと対岸を見つめる主人に問いかけてみた。

シュウの問いかけにレンは視線を対岸に固定したまま答えた。

「いや、ここにはいない。だが、こちらを見ている濃い闇の魔力を感じる。おそらく最終防衛戦に配備されているのだろう。だが・・・何度か探りを入れたが、結界に綻びがなく侵入も儘ならず結局何も掴めなかった。・・・無闇に魔法攻撃はできんな」

苦々しげに告げる主君を見ながら、シュウは疑問を問う。

「無国の防衛線まではかなり距離があります。国境の戦いで殿下が魔法を使っても邪魔は出来ないんじゃないのですか？」

「いや、こちらに意識を集中しているのか、すでにかなりのプレッシャーを感じる。遠距離の魔法転移ができる魔法使いは互いに脅威だな。しかし今回は前のように還されてはたまらん」

まだあれからたった4日しかたっておらず、レンの高い自尊心はいまだ傷ついたままだ。

2度も失敗するわけにはいかない。故に、国境戦は慎重に正攻法で攻めることにした。

「こちらの数の方が多いのだ、正攻法で正面突破するぞ。じきに本体も合流する。それまでに奴等の防衛線まで軍を進行させておけばいい。もし闇の魔法使いが私と同じように転移魔法を使うなら、すぐに気付く。魔法陣が展開される前に空間を固定し結界を敷いて転移を止める」

レンは対岸の無国の軍を見据えながら、もうまもなく始まるであろう戦いに集中していった。

立ったまま、国境のある方角を見つめ続けていたヨルは、何かに気付いたようにハツとした。

「ッ！！始まった！」

国境が始まった、沢山の魔力のぶつかり合いをヨルは感じ取っていた。

（でも、『金色』の人は動いていない・・・、こちらを警戒している？）

ヨルは今は共にいないステラに心の中で話しかけた。

ステラ？国境に着いた？

ええ、こっちはだいたい混戦しているわ。でも少しずつだけど、こちらが押されているみたい。これも作戦のうちなのかもしれないけど・・・、まあいいわ、こっちは予定通りヨルの魔法中継地点として待機しているから、後はよろしくねヨル

ヨルは次に、グレンに意識を繋ぎ、心で呼びかけた。

グレンとは、転移用の目印にと刻んだ魔方陣を中継に、こちらから呼びかければ会話が出来るようになってる。

グレン、ステラの準備完了だよ。私は、これから結界敷いて魔法陣を展開するね

すぐにグレンから 了解！ と返答がきた。

ヨルはすぐに自分の周りに強力な2重結界を敷いた。
自分の魔力が外部に洩れないように、地中にも結界を敷く。球状の結界だ。

おそらく、非常に警戒されているはずなので、『金の魔法使い』のように巨大な魔法を転移させようとすると、転移する前に気付かれてしまう可能性が高い。

なので、あらかじめヨルの魔法の中継としてステラに国境に行ってもらったのだ。

魂が繋がっている為、どんなに距離があっても一瞬で魔法を送れる。

転移にかかる時間の節約というわけだ。

（この作戦は、あちらとこちらの連携が鍵だから、慎重にやらなくちゃ）

ヨルは長い帯状の魔法陣を展開して、どんどん伸ばしていく。
魔方陣とは丸い形だけではないのだ。

今回は川の水を利用した魔法なので、川に沿って細長い魔法陣を展開し固定していく。

闇色の帯状の魔法陣が、静電気のようなパチパチと音を立てながら完成され固定されていた。

次に、最初の魔方陣を維持したまま、もうひとつ魔方陣を展開していく。

ややあつて、そちらも無事に完成した。

（後は、ステラと瞳を繋げておけばいいよね。・・・ステラ？
よろしくね）

おけー！

（・・・・・・なんか軽いな（苦笑））

ステラの瞳と繋がり、ヨルはステラの見ている国境軍の戦いを目の当たりにした。

初めて見る、本物の戦場に衝撃を受ける。

（これ・・・が、戦い・・・でも、逃げない、守りたいから）

ギュッと手を握り締め、目を逸らすことなく戦場を見つめる。

合図は、敵の半数以上が渡河してきたら、蒼の騎士団長シアンの合図で兵達を一時退却させる。

シアンには事前にステラの事を伝えておいたので、シアンからステラに合図を送ってもらう。

当然、瞳が繋がっているヨルにも合図が送られ、後は思い切り川に魔法を叩きこめばいい、と言われている。

身内に被害が出ないように、兵達に強めの結界石を持たせているので、巻き込まれても死ぬことはないはずだ。（多分・・・）

（今の所は『金の魔法使い』に動きはないけど、もし動くならそっちを優先にしないといけないんだよね・・・。結界のせいでこちらからも魔力感知が出来ないし、少し不安だな・・・。それにしても、なんで何もしてこないんだろ？）

ヨル？もし金の魔力を感知すればすぐに知らせるから大丈夫よ。あちらもヨルを警戒しているはずよ？だってあれだけの魔法を還されれば脅威以外の何者でもないわ。後は、ヨルが落ち着いてやれば、この戦いを乗り切れるわ

ヨルの心の声はステラに届いてしまっていたらしい。

うん。ありがとう

ヨルとステラは、シアンの合図がいつきてもいいように戦場に意識を集中させた。

第11話 『戦いの恐怖』

—— 無国最終防衛線

紅^{あか}の騎士団陣営 指令本部天幕

「グレン団長！兵の布陣完了しました。それと、たった今ヒスイ団長から連絡がきました。国王陛下が、国民に現状を伝えたそうです。それほど大きい混乱はなく、戦えない者達の避難が始まったそうです」

ミズトの報告を受け大きく頷いたグレンは、天幕に集まっている隊長達を見渡して口を開いた。

「皆も知っている通り、すでにホムラ国の攻撃で多くの犠牲者が出ている。誰もが非常に困難な闘いになることがわかっていたはずだ。だが、どうやら我々は奇跡的なタイミングで最強の魔法使いと出会えた。作戦の為とはいえ、今1人で戦場に立つあの娘^この為にも、我々はここを死守しなければならぬ！」

「「「「「はいつ！」「」「」「」」」」」

報告会議が終り、それぞれの隊長達が出て行き、本部天幕にはグレンとミズトの2人だけになった。

どちらともなく沈黙がつづいたが、ミズトが先に口を開いた。

「わかっていますよ、団長。本当は、1人にさせたくなかったので

しょう?。」

ミストの言葉にグレンは大きく息を吐くと、天幕の中央に置かれている机に寄りかかり視線を下に落とした。

「ヨルは・・・ヨルの力は国の戦力になる。理解はしているはずなんだがな・・・。やはり心配にはなるさ。まだ18歳の女の子に、人を殺せと言っているんだ。」

「ヨルさんは、すべてわかっていて立ち向かっているんです。前に進むことを選んだのはヨルさんです。団長は、ヨルさんの背負う物を共に背負ってあげればいいじゃないですか」

ミストの言葉に視線を上げたグレンは、少し呆れた顔で笑っていた。

「ハハハ、おまえ、俺の母親みたいだな（笑）いや、さすがは『調和のミスト』か。」

ミストの言葉は素直に心に届く、優しい言葉だ。

「やめてくださいよ。こんなに手のかかる子供はいりません。」

ミストは、言葉とは裏腹に穏やかな表情で微笑んでいた。

ジワジワと戦場を後退させられていくシアン達を、ステラの瞳を

通して見ていたヨルは、視界の端にキラリと光る何かに気付いた。
ヨルの意思を感じたステラは、視線をその光るものに集中させた。
魔法で巻き上げられた土や水、焼け焦げた人や馬、敵味方が入り
乱れる中に異質に見えるもの。

よく目を凝らして見ていると、光るものが人の髪だと気付いた。

（髪？・・・黄色？ツ！！違う！金色だ！金の髪！）

戦場の只中にあるにもかかわらず、その人の髪は美しく輝いていた。
た。

間違いない、見た瞬間にわかる。違いは歴然だ。

（あれが、『金の魔法使い』だ。でも、魔法を使わずに剣で戦っ
ている・・・。やっぱり私の事警戒しているのかな？）

あれほどの魔力を持っていて、人とは違う『特別』な『色』を持
つ人。

なのに剣で戦う様も一際鮮やかで、金の髪が舞う姿は、見とれる
程だ。

よく見ると纏っている鎧が他の騎士や兵士と違うようだ。

（やっぱり幹部クラスの人？）

金の魔法使いの魔力を探ってみても、魔法を使う気配がない。
戦っている場所も、決して前に出すぎず後方をキープしている。
常に周りに目を配り、渡河する為に最前線で戦っている兵達に細
かい指示を次々と出しているようだ。

ステラは視線を川に移動させると、川にはかなりの数のホムラ軍が渡河の為に押し寄せていた。

自軍の優勢をみじんも疑ってはいない。

そろそろ合図がくると、ステラもヨルも身構えた。

まさにその瞬間、合図にと決めていた、蒼の閃光弾が大きな破裂音と共に空に上がった。

ヨルッ！！

それは一瞬だった。

閃光弾に気付いた無国の兵達は、一気に退却する。

敵の異変にすぐさま気付いたレンが、兵達に退却指示を出した瞬間に、バチバチと凄まじい音と共に川が爆発した。

ソレを目にした者は、まるで天から神の雷いかずちが落ちたようだったと言った。

煙が晴れ視界が回復すると、ホムラ兵は愕然とした。

河が闇に染まっている。

いや違う。かつて人だった物が河に浮かんでいるのだ。それも何千と・・・。

かろうじて人とわかる形を残してはいるが、ほとんどが炭のようになっている。

言葉もなく、河を見つめていたホムラ兵達は、闇に染まった河中のあちこちで動くものを見つけた。

逃げ遅れた無国の兵だ。

無傷とはいかなかったものの、持たせていた結界石がうまく作用し、無事だったようだ。

辺りを見渡したレンは、目を見開いたままワナワナと体を震わせていた。

「・・・なんだこれは？なんなんだこれは？私の兵達がッ・・・！」

主君を守る為に共に戦っていた従者のシュウは、すばやく状況を判断すると、レンに退却を促す。

「殿下！ここは一時退却を！本陣と合流しましょう！」

シュウの言葉にレンは、カツ！と目を見開き、シュウを睨みつけた。

「こんな！こんな状態で逃げろ？私が、一方的にやられて逃げるというのか！！」

「そうです！このまま戦っても戦力に差がありますます！それに、再び同じ規模の魔法攻撃を受ければ全滅してしまいます！」

「魔法・・・そうだ魔法だ！なぜ気付かなかった？あれ程大きな力に。なぜだ！？」

混乱し、理性を失った主君の瞳を真正面から見つめ、シュウは声を荒げた。

「殿下！レン殿下！しっかりしてください！あなたはホムラ国皇太子レン・フォルド・ホムラなんですよ？お心強くお持ち下さい！あなたが今すべきことはなんですか？」

シュウの言葉にハツとしたレンは、ゆっくりとシュウに視線を合わせた。

シュウは主君の瞳に理性が戻った事を確認すると、地面に膝を付き頭を下げた。

「殿下、緊急時とはいえご無礼を・・・罰は受けます。ですが、今は状況の把握と軍の立てなおしをお急ぎ下さい。」

再び辺りを見渡したレンは、瞳をギュッと閉じて唇をかみ締める。そして、目を開いたレンは兵達に撤退する命を下した。

「一時撤退する！本陣と合流し体制を立て直す！」

シュウは、レンが握り締めている拳から血が滴り落ちていることに気付いたが、何も言えず、ただ滴る血が地面に吸収されていくのを見つめることしか出来なかった。

「シュウ、頭を上げる。お前のおかげで冷静になれた。」

レンは前を向いたまま、従者に自分の言える最大限の礼を言った。

一部始終を見ていたステラ。そして、自分の行った行為を目を逸らさずに見ていたヨル。

念の為にと２段階で魔法を準備していたが、最初の攻撃で片が付

いてしまった。

ヨル？

ステラがヨルを心配して、心で喋りかけたが返事がない。
まだヨルと繋がっているはずなのに、とても不安定な感じた。
ステラは急に不安になり、ヨルに何度も呼びかけた。

ヨル？ヨル！！

何度呼びかけてもヨルから伝わってくるのは、不安と恐怖、そして混乱。

ヨル？作戦はうまくいったのよ？ヨルは沢山の命を奪ったかもしれないけど、それ以上に沢山の命を救ったわ。胸を張れとは言えないけど、戦争は1人で背負うものではないわ。私やグレン、共に戦ったみんなで背負うものなのよ？大丈夫よ？

幼子に話しかけるように優しく話す。ステラは辛抱強く何度も大丈夫と繰り返ししていた。

しばらくすると、小さくヨルの返事が聞こえた。

うん・・・

返事が来たことに安心したステラは、すぐに戻るからヨルは転移でグレンのところに帰っていなさいと伝え接続を切った。

（初めての戦争であまりにも身近に感じる生と死が、ヨルに恐怖をもたらしたのね。何も感じないよりずっといいわ。戦いは悲しいと知っている方がずっといい・・・）

ステラは、早くヨルのもとへ戻る為に真っ直ぐに駆けていった。

作戦成功の一報は、すぐにグレンたちのいる防衛線に届けられた。敵が退却したことに一先ず胸を撫で下ろしたが、まだ本体がくるのだ。のんびりはしてられない。

だが、もうすぐ一番の功労者であるヨルが戻ってくるはず。まずはゆっくり休ませよう。

そんなことをグレンが考えていると、小さな泣き声が聞こえた気がした。

気のせいかと思ったが、再び聞こえてくる。今度は小さな声で自分を呼ぶ声。

・ヒ・・・ツク、フ・・・グ、レン・・・

「ヨル？」

思わず、声を出して呼んでみた。

すると突然目の前にヨルが現れ、グレンの背中に手を回し、ギューっと抱きついた。

ヨルの突然の行動にグレンは驚きつつも、そっと頭に手を置き優しく撫でる。

「どうした？今日はありがとう。ヨルのおかげで沢山の仲間が助かった。」

グレンの言葉にヨルはゆっくりと顔をあげた。

ヨルの身長は平均より高めだが、グレンは更に高く、ヨルが見上げる姿勢になることは仕方なかった。

涙で潤んだヨルの瞳が、グレンの燃えるような紅の瞳とぶつかる。

そう、まだ18歳なのだ。自分達を守る為とはいえ、沢山の人間の命を奪ってしまったのだ。

耐えられるわけがなかった。

それに気付いたグレンは、ヨルの背中に手を回し、優しくヨルを抱きしめた。

「ヨル、ヨルは俺を人殺しと思うか？」

腕の中で、ヨルが小さく首を振った。

「でも俺は、国を守る為に沢山の人を斬ってきたし、これからも斬るだろう。これからは、ヨルを守る為に人を殺すかもしれない。そんな俺を人殺しと罵るか？」

今度は大きく首を振る。

「ありがとう。俺もヨルのこと人殺しなんて思わない。みんなを守ってくれてありがとう。ヨルの背負うものは俺も一緒に背負うから、そんなに泣かないでくれ」

ヨルはグレンのぬくもりに包まれながら、だんだんと落ち着いていった。

（強くならなくっちゃ。みんなをまもる為に、グレンを守る為に

も……)

暖かなグレンの腕の中は、とても安心できるようで、ヨルの意識は少しずつ闇に溶けていった。

突然グレンの背中に回していたヨルの腕が緩んで、膝から力が抜けた。

ガクンと体が傾ぎそうになり、グレンは慌ててヨルを抱き直した。

「ヨル？」

そつと顔を覗きこむと、涙に濡れた顔で穏やかに眠っている。

「おやすみ、ヨル」

せめて今だけは穏やかに……。

第12話 『新たな決意』

ヨルが眠りについて半時ほどでステラが戻ってきた。かなり急いで戻ってきたらしく、珍しく息が上がっていた。

「ヨルは眠ったの？心が不安定だったから少し心配だったんだけど・・・」

穏やかに眠っているヨルの顔を覗き込みながらステラはヨルに寄り添う。

「当然だよな。人を殺すということはとても辛く苦しいことだ。ヨルはそれを知っているから、悲しむ。そして、守る為にはまた命を奪わなければいけないから、苦しむ。」

「だったら、守ってあげて。その悲しみからも、苦しみからも。なんでも1人で頑張ろうとしてしまうから、心配だわ。でも、やっと私以外の人に甘えられるようになってきた。正しく導いてあげて。決して闇は不吉ではないと、闇は等しく誰にでも訪れる優しいものだ。」

まるで母のように、ヨルを包み込み守るステラ。

「ステラにとって、ヨルは娘のようなものか？」

「いいえ、全てよ。魂まで繋がっているんだもの。・・・知ってた

？人間はもう忘れたかもしれないけど、運命さだめの女神の纏う色は『夜』なのよ？」

ヨルの活躍から半日が過ぎた頃、国境のシアン率いる軍が最終防衛線・・・今後は絶対防衛線となる場所で合流した。

シアンの軍は、足止めと、時間稼ぎを充分果たしてくれた。にもかかわらず、半数以上の兵が無事に合流できたのはヨルのおかげだ。

「グレン！助かったよ、君の魔法使いがいなければ、もたなかっただろう。それほどホムラ軍の勢いは凄まじかった」

シアンとグレンは、互いの無事を確かめ合うかのように、がっちりと握手を交わした。

「いや、シアンの指揮とタイミングが絶妙だったと、ヨルが言っていたよ。早くもなく、遅くもなく、完璧なタイミングだったと」

「ハハハ、お褒めに預かり光栄だ。それで、その魔法使いの姫はどこに？直接会ってお礼を述べたいのだが？」

「ああ、今は結界の最終調整で、見回りに行っているから、もう少ししたら戻って・・・と、言ったら帰ってきたようだ」

グレンがシアンの後を見ながら笑顔で手を振った。
シアンがそれに気付き、振り返ると、目の前に絶世の美少女が佇んでいた。

「・・・・・・・・！！！！」

思わず、グレンを引っ張りヨルと距離を置くと、シアンはグレンに聞いた。

「アレはなんだ？人か？お前そんなに面食いだったか？にしてもアレはないだろう・・・人外だよ、綺麗すぎるだろ、通信の時は映像が悪くてしっかり見れなかったが・・・」

「ああ、もう煩いな。ヨルはれっきとした人間だ。普通の人間より少し可愛いだけだよ」

平然と惚気る同僚にシアンは諦めとも言えるため息を吐いた。

「お前、アレはやばいぞ。よしんば、この戦争が終わって無事に国に帰っても大変な事になる。陛下が放っておくわけではないぞ？間違いないく会わせると言うし、下手したら手元に置こうとするかもしれない」

ムツとした表情になったグレンは、手持ち無沙汰に立ち尽くしているヨルを見つめた。

グレンと目が合うと、ヨルはニッコリ笑う。うん、可愛い。

「じゃなくて、わかっている。そんなことは真っ先に頭をよぎったさ。だが、今は緊急事態だ。そんなことを言ってられんし、こんな事を言い合っている場合でもないと思うぞ？」

グレンは立ち尽くしているヨルに手招きをした。
嬉しそうに駆け寄ってくる姿がたまらなく可愛い。

じゃなくて、シアンに紹介するべくヨル自分の隣に立たせる。

「ヨル、紹介するよ、国境の軍を率いていたシアンだ。」

「改めて、初めまして。魔法使いの姫。私は蒼を纏いしもの、シアン・ソール・シランドと申します。以後お見知りおきを。そして、このたびはご協力に感謝いたします。」

若干緊張してた為か、ヨルは無意識にグレンの服の袖口を強く握っていた。

それに気付いたグレンがヨルを見て微笑んだ。

「初めまして、闇を纏いし者、ヨル・セラス・セラヴィーンです。お力になれてよかったです」

シアンの、騎士のわりに優しげな風貌と雰囲気、ヨルの緊張を溶かしてくれたようだ。

ふんわりと微笑みながら、シアンに自己紹介をした。

「本当にありがとう。君のおかげで沢山の兵が生きてここにいる。だから、戦いの悲しみは君1人で背負い込まないように！戦争は1人ですものじゃないんだからね。力は使う人間の心で大きく変わってしまう、だから優しい心で使ってあげて」

シアンの暖かい言葉に心打たれたヨルは、ちょっぴり泣いてしまった。

上を向いてグレンの顔を見ると、複雑そうな顔をして笑っている。

こうしていると、もうすぐここが戦場になるなんて嘘のようだ。
暖かい人たちに囲まれて、より一層守りたいという思いが強くな
った。

「グレン達はみんな優しいね。優しすぎるよ。優しい人達を守れる
ように私も頑張るね」

—— ホムラ国軍 本陣

実際、焦っていたのは事実だ。

魔法で手っ取り早く終わらせて、さっさと国に帰りたいかった。
無国とか領土とか、本当はどうでもいい。

ただ、自分は皇太子だから、人の上に立つ為に生まれたから、そ
んなことは言えなかった。

それが、ホムラ国皇太子レン・フォルド・ホムラだ。

「ホムラ様、ご無事でなによりです。」

（思ってもいないことをよく言う）

本陣を率いてきた、將軍のジラスはいやらしい笑みを隠すことな
く、レンを正面から見据えていた。

先陣がほぼ壊滅し、わずかに残った兵達とレンが、本陣と合流し

たのはあれから半日ほどたった頃だった。

「相手に、あれ程の魔法使いがいるとは誤算でしたな。あなたの唯一の取柄である魔法も今回ばかりは役に立たなかったと聞きますが？」

要は、魔法しか役に立たないのと言っているのだろう。

「そうですね、今回は後手に回りましたが、今後あの魔法使いを牽制できるのは私ぐらいでしょう？体調を整え、次の戦闘に備えます。では、これで失礼します、ジラス將軍」

どんなにレンが邪魔でも、魔法使いには、魔法使いでしか止められない。

ジラス將軍がどんなにレンを邪魔に思っても、これは変えられないのだ。

ジラス將軍が苛立ちで怒鳴りだす前に、レンはさつさと退散した。疲れた体は今にも悲鳴を上げそうで、早めに休息を取らなければ次の戦闘に差し支えるだろう。

あの魔法使いに対する、対抗手段も考えなければいけない。

自らに与えられた天幕に向かう途中で、従者のシュウが跪いていた。

「殿下……。先ほどは申し訳ありませんでした。」

シュウはレンの足元に跪き、顔を上げないままレンに対する非礼を詫びた。

「何のことだ？おまえは従者としての仕事をしたに過ぎない。気にするな。もう顔をあげろ、おまえまで変わってしまったえば私はどうすればいい？お前はそのままにいる」

レンの滅多にない暖かな言葉に、シュウは立ち上がり、深く深く頭を下げた。

「シュウ、次は正面から戦う戦闘だ。相手も見えるはず。私は、闇の魔法使いに集中する。お前は私を守れ」

殿下が、自らを信頼し、背中を預けると言ってくれている。

「はい！我が命にかけまして、お護りいたします」

「お前が死んだら、私も危なくなるのだ、だから死ぬな。生きて私の側にいろ」

言うだけ言って歩いて行くレンの背中に向かって、シュウは再び深く深く頭を下げ続けた。

第12話 『新たな決意』（後書き）

10月に入ってから、体調を崩し更新が今日までできませんでした。風邪をこじらせると怖いと思い知らされた、今日この頃です。

とりあえず、1話〜10話まで、何箇所か手直しさせていただきました。

体調はよくなりましたが、仕事に復帰する為、またまた亀になりますが、よろしく願います。

第13話 『戦いの始まり』

今は昔、忘れられた神々の時代

夜と闇を司る、運命さだめの女神『エカトウリュシカ』
昼と光を司る、導きの男神『サクトウリュース』

闇は全てを飲み込む最強の『剣ツルギ』
光は闇を切り裂く唯一無二の『剣ツルギ』

『エカトウリュシカ』は『金の盾』を従え 運命さだめを紡ぎ
『サクトウリュース』は『銀の盾』を従え 人々を導く

夜と昼 昼と夜 決して重なることはない
闇を照らすのは光 光を翳らすのは闇
表裏一体、2柱の神

今は昔の忘れられた神々の名
今も識る『人』は、もういない・・・

空が、闇に支配され始めた頃、絶対防衛線に第一報が届いた。

「ホムラ軍確認！数17000！指揮官はジラス將軍！距離200

で展開しました！」

馬上にいるグレンとシアンに緊張が走る。

最前線にいる2人は厳しい目で前方を見据えていた。

「17000か、数はほぼ互角。後は指揮官の質と魔法部隊の数で決まるか？」

「確かに魔法部隊の数では、向こうが有利だろうな。ヨルも金の魔法使いに集中するし……。しかし、あちらの將軍はジラスだ。とても名将とはいえない貴族のボンボンだし、勝機はあるさ」

グレンは後を振り返り、高台に控える魔法部隊を見つめた。

そこにヨルがいるはずだが、ここからは遠くて確認ができない。

護衛を付けると言ったが、かえって足手まといになると断られた。ステラが護ってくれるからと言ってはいたが、やはり心配だ。

心配そうに高台を見つめるグレンに、シアンがやれやれと肩をすくめた。

「そんな心配するな。契約魔獣もいるのだろう？ しかもあれ程の魔法使いなら、むしろ俺達より安全だ。さて、俺は戻るぞ。指揮官はお前だ！感情にまかせてミスるなよ？じゃあな、死ぬなよ！」

両軍、一触即発の緊張は、ホムラ軍の攻撃魔法で解き放たれた。

開戦の合図とばかりに、炎の矢が大量に降り注いでくる。

「開戦！開戦！各隊散開！陣を崩すな！」

最初の攻撃は、結界に当たって消滅した。

更に第二派、第三派と魔法が降り注げば、結界にも綻びが生じて

しまつたろう。

やはり魔法部隊の数の差が戦局を左右しそうだ。

地上では兵達が入り乱れ、上空では魔法が飛び交う。

ヨルの事は心配だが、ステラという心強いボディーガードがいる。グレンも今は戦いに集中するべく、敵陣に突入していった。

後方支援の魔法部隊がいる高台も、開戦と同時にすぐに慌しくなった。

支援する為にいる彼らは、結界の維持や、負傷者の治療に奔走している。

戦いが始まってからも、少し離れた場所に立つヨルは動くことなく、ただ1つの気配に集中していた。

ステラには後方援護を頼んでいる為、少し離れた場所で待機してもらっていた。

あたりが濃い魔力に包まれていく。

多くの魔法使い達から洩れ出た魔力が、重なり合い、濃霧のように漂い広がっていく。

「来たっ!!」

一瞬肌が粟立ち、すぐに刺すような鋭く強い魔力を感じた。

上空を見上げると、人間大の火の玉がいくつも降り注いできている。

いくつかを氷の魔法で相殺し、近くにいる魔法使い達に被害がな

いように壁を作りガードした。

そのまま距離を取りながら、雷の矢をいくつも作り、魔力の発動付近に力まかせに叩き込んだ。

バリバリと遠くで音がしたが、刺すような魔力は全く衰えない。

（手ごたえを感じない。障壁で防がれた？なら・・・）

ヨルは竜巻を起こした。が、すぐに向こうから、大量のかまいたちが飛んできて相殺されてしまう。

当然予測はしていたので、魔力の痕跡を辿って、もう一度大量の雷の矢を叩き込んだ。

そのまま数メートル後に転移して、新たな魔法を展開しようとしたら、足元に金の魔法陣が転移してきた。

ヨルは金の魔法陣を一瞬で闇に塗り替え、魔力を上乗せして相手に還す。

辺りに爆音が響きわたるが、手ごたえはない。

（（強い！！））

姿は見えなくても、互いの魔力を感じ取りながら、ギリギリで避け、攻撃をする。

魔法使いの戦いは、魔力の量と集中力が要になる。

長引けば、魔力切れや、集中力切れで隙がでやすい。

だが、金の魔法使いには全く隙がない。一瞬でも気を抜けばこちらが危ない。

何度も、発動、相殺、転移を続けていても、相手が衰える様子はない。

チラリと戦場を見れば、かなり陣形が崩れている。やはり数で劣る魔法部隊が押されているのだ。

（この人さえ押さえ込めれば、駆けつけられるのに！！）

ヨルは、周りの魔法使い達を巻き込まないように、高台の横に広がる平原の方へ移動した。

突如、至近距離から光の矢が大量に転移してきたが、障壁で防いだ。

障壁を展開したまま、魔法で水蒸気を発生させ、視界を塞ぐ。その隙に火と風の魔法をイメージする。

真正面に炎の竜巻が発生し、金の魔法使いに向かっていった。

（こんなので、どうにかなるわけじゃないけど、時間稼ぎにはな
って頂戴よ！ ステラ！）

ヨルは視界をステラに繋げて、金の魔法使いの場所を正確に確認し補足する。

闇の魔力を開放して、金の魔法使いの足元に転移させた。

（捕らえた！？）

まだよ！ヨル！

捕らえたと思ったが、ギリギリで逃れられた。

そのまま発動したヨルの魔法が爆発し、戦場に激しい爆音が響きわたる。

ヨルは、爆風を障壁で防ぎながら、金の魔法使いの気配を探っていた。

（アレ???さっきまであんなに魔力を感じてたのに・・・どこに
?）

さつきまで常に感じていた巨大なプレッシャーが急になくなったのだ。

爆発の影響で砂埃が舞い、視界が異常に悪い。

辺りに気を配りながら、神経を集中させていた時、ステラの悲鳴が頭に響いた。

ヨル!!!

ヨルの耳に、何かが空を切る音が届く。

振り返ったヨルの瞳には、剣を振り下ろす金の魔法使いが写っていた。

「動きが遅い！右翼の魔法部隊が押されて陣形が崩れてるぞ！増援を送れ！」

グレンは、正面から来るホムラ軍の兵士を一刀のもとに両断すると、押されている右翼へ指示を出し、自らも右翼へ向かった。

「結界最大！押し返せ！」

結界石と結界の相乗効果で、中級魔法使いレベルの攻撃魔法では致命傷にはならない。

ヨルが結界石の強化をしてくれたおかげで、戦場でかなり楽に動ける。

ホムラ国の魔法部隊を、グレンは力技で押し返す。

「小さな魔法は気にするな！目の前の敵に集中しろ！押し込め！」
兵と魔法使い達に指示を出していたグレンの耳に、後方からの激しい爆音が届く。

少し遅れて爆風が戦場を駆け抜けた。

（ヨル??）

ヨルがいるはずの高台の方を見ても、そこにヨルがいるか確認はできない。

先ほどの爆発は火薬ではなく魔法で起きたものだ。
だとしたら、あれほどの威力の攻撃をしなければいけない魔法使い同士が戦っていることになる。

ヨルは金の魔法使いと戦っている、そう確信した。
煙が上がっている場所は高台より、戦場に近い平原だ。

他の魔法使い達を巻き込まない為に移動しながら戦っていたとしても不思議ではない。

（大丈夫だ・・・ステラもいる）

次々と襲ってくる、ホムラ軍の兵を切り伏せながら、グレンはただ祈ることしかできなかった。

第14話 『以外な終り』（前書き）

総合PV20000越え、ありがとうございます！

第14話 『以外な終り』

キイ――ン

ヨルは魔法で出した闇色の剣で、金の魔法使いの剣を真正面から受け止めていた。

金の魔法使いは、自らの体をすばやく結界で包み、魔力を感知できないようにした。

そして、視界が塞がっているうちに徒歩で回り込み、ヨルの後ろから剣を振り下ろしたのだ。

条件反射。まさにソレだ。

魔法学校では、魔法使いの弱点を補う為に、剣と体術の授業がある。

魔法を構成し、魔力を練っている間はどうしても無防備になりがちだ。

4年間の基礎が終われば、剣か体術、好きな方を選択して3年間みっちり魔法と共に学んでいく。

深く飲み込まれそうな闇と、目が眩むほどの金の出会い。

このとき初めて、『闇』と『金』が互いをはっきりと認識した。

互いに、わずかに目を見張ったが、そのまま大きく後に跳躍して距離を取った。

初めてヨルを目にして、美しい少女だったことに驚きつつも表情は変えないままだ。

「・・・初めましてというべきか？闇の魔法使い。まさか剣も使えるとはな」

「そうね。うちの魔法学校は剣の授業は必修だったのよ！」

金の魔法使いに向かってヨルは駆け出した。

剣と剣がぶつかり合う硬質な金属音が辺りに何度も響きわたる。

「くっ！おまえ！魔法使いの癖して剣も強いなんて卑怯じゃないか？」

「自分の事、棚に上げて何言ってるのさ！『イカズチ！』」

ヨルの剣がスパークした。そのまま相手に向かって剣を振り下ろす。

金の魔法使いも、負けじと剣に魔力を流し込みイカズチの剣を受け止める。

バチバチと辺りに凄まじい音が響き渡った。

再び互いに距離を取るが、ヨルは沢山の光球を作り出し、金の魔法使いに向かって叩きつけた。

金の魔法使いは転移して光球を避けたが、それを読んでいたヨルも同時に転移して、再び剣を振り下ろす。

なんとかそれを受け止めた金の魔法使いは、自らの周りに炎を噴出させ、ヨルから距離を取った。

ハア、ハア、ハア、ハア・・・

互いににらみ合ったまま対峙していると、ヨルの背後からステラが現れた。

金の魔法使いに向かって低く威嚇している。
ヨルに加勢するためにきたようだ。

「な、なんだソレは・・・、銀の魔獣？クソツ！俺はお前に殺された何千という兵達の仇を討たねばならない！こんなところで負けるわけにはいかないんだ」

突然現れた巨大な銀の魔獣に、金の魔法使いは己の不利を悟りうるたえた。

ただでさえ魔法は互角、剣も使える相手に、魔獣の相手もするとなれば1人では荷が重い。

こんなとき、危険だからと置いてきた、己の従者の顔が思い出される。

金の魔法使いの言葉にヨルは、わずかに目を見張ったが、表情を変えることはない。

相手をジッと見据え、静かに口を開いた。

「・・・殺したくて、殺したわけじゃない。護りたいものがあつたから戦っただけ。兵士達もそうでしょ？護りたいから戦う。家族を、恋人を、友を。戦った結果がそうだっただけ」

「敵だから、心は痛まないのか？アレだけの殺戮を犯して、あの場を見て、お前は何にも感じないのか！？」

「先に攻撃をしかけたのはあなた達でしょ？自分達は良くて、私達は駄目なんてそんなのは子供のわがままよ！傷つける覚悟をして戦ってるの！たとえ人を傷つけても護りたいものがある！あがいて何が悪いの？国を守るなんて大儀これっぽっちもないけど、ただ自分の大切なものだけは護りたい！エゴだと言われてもいい、それが」

私』だもの！それが私の『意思』なの！」

「ッ！！」

金の魔法使いは、苦しそうに俯き剣を握る手に力を込めた。

ヨルも間合いを取りながら、いつでも攻撃できるように集中する。いつまでたっても俯いたまま顔を上げない金の魔法使いをヨルは黙って見据え続けた。

「・・・やめた。」

「・・・・・・・・へ？」

思わず間抜けな声を出してしまった。

「私自身に、この戦闘に参加する意志はない。ただ命じられたから、戦闘に参加しているだけだ。」

金の魔法使いは、そう言うのと剣を鞘に収めた。

「そういえば、名も名乗っていなかったな、私はホムラ国皇太子、金を纏う者、レン・フォルド・ホムラだ。レンと呼んでくれ」

「・・・・・・・・闇を纏いし者、ヨル・セラス・セラヴィーンです。・
・って、え？皇太子？」

ヨルとステラは、戦っていた相手が皇太子だったことに驚き隠せないでいた。

「では、ヨル。私は戻る。どうせジラス將軍の指揮では蒼の騎士と

紅^{あか}の騎士には勝てない。

この戦闘が終わるのも時間の問題だ。戦闘さえ終われば、しばらく無国にちよっかいを出す余裕もなくなるだろう。ある意味この戦闘は我々が握っていたようなものだしな。」

あまりの展開に頭がついていけない。

「ちょ、ちょっとまって、え？なんで？意味わかんないんだけど。私達さっきまで殺し合いをしてませんでしたか？」

「なんだ？おまえは私を殺したいのか？」

「殺したくないよ！！誰であろうと殺したくなんてない！」

「私もだ。命じられるまま魔法を揮い、沢山の人を殺した。だが、殺したかったわけではない。お前に言われて気付いた。いや、気付けたというべきか。いつからか自分で考えることをやめて、命じられるまま動いていた。それが当たり前だと思っていた。」

レンは肩から力を抜き、大きく息を吐いた。

「……でも、あなたはお人形ではない……？」

ヨルの呟きに、レンは初めて微笑んだ。

「そう、これからは皇太子としてできることを『考える』。とりあえず、戦争を終わらせ、兵達を国に連れて帰る、だな」

どこかふっきれたようなレンの様子に、ヨルも剣を消して警戒を解いた。

「でも、ホムラ国の王は戦争を、この国を望んでいるのでしょうか？
また、戦いになるんじゃないの？」

「確かに、今回の戦いは父が望んだことだ。だがしばらくは国が荒れる予定だから、無国に手を出す余裕はなくなるな」

「え？荒れるって、何か起こるの？」

意味がわからないといった様子で、首を傾げるヨルにレンは苦笑した。

「いや、起こすんだ。」

「へ？」

また、間抜けな声を出してしまった。

「この敗戦を機に、父には玉座を降りていただく。たとえ力ずくでもな。私は戦いを望まない。それよりもやらなければいけないことが沢山ある。」

レンの『意思』のこもった強い瞳に嘘はない。

「そっか・・・、レンが王様になったら戦争は起こさない？」

「しない！金もつたいたい。そんなことをするより国交を正常化して商売をしたほうが国が潤う。」

希望に満ちたレンの瞳はキラキラと輝きとても綺麗だ。

人と人が分かり合うことは、とても難しいようで、実はとても簡単なかもしれない。

「では、戦闘を終わらせてくるか。」

「あつ！私も行く。あそこには大事な人がいるから。」

二人向かい合って、微笑みあった。さっきまで戦っていたのが嘘のようだ。

どこか懐かしいような金の瞳。

どこか畏怖さえしそうな闇の瞳。

「次に逢えたら、王様だね？」

「ああ、だが、次に逢ったらゆっくり茶を飲もう。魔法の話をした
い。」

「はい。その時はゆっくり語り合いましょう。」

チラリと戦場を見れば、やけに静かなのに気付いた。
どうやら、ジラス将軍を捕らえたようだ。

「ここからが俺の仕事だな。じゃあな。」

レンは王になる為の道の第一歩を踏み出すべく、戦場に向かって
転移した。

残された、ヨルとステラの間に重く、空気が流れる。
重い空気にいたたまれなくなって、ヨルは先手必勝とばかりにス

テラに頭を下げた。

「……ステラ、ごめん。飛び出さないように我慢してくれてたでしょ？ ホント心配かけてごめん、そしてありがとう」

「まったく……冷や冷やしたわよ。ふーんだ、グレン言ってやる」

「っな！！！！卑怯だよそんなの！！ってゆうか、いつからそんなにグレンと仲がよくなったのさ！？」

「知らな～い（笑）。でも無茶はしない約束だったでしょ？ 怒られるわよ～？」

「~~~~~！！！！」

戦場に向かって歩きながら、ヨルはどうやってグレンに誤るか悩み続けていた。

第14話 『以外な終り』（後書き）

ヨルは剣を使うときは、剣に集中してしまうので、魔法の発動は簡易呪文を唱えます！

第15話 『和平への歩み』

ヨルはレンと違って、歩きながらグレンを探すことにした。
転移した場所が、取り込み中だったら、ものすごくいたたまれないからだ。

（前に、やらかしちゃったことあるし、あの空気は辛すぎる……。そんなに遠くないし、歩いて行こう。）

戦場の方からは、グレンに刻んだ魔法陣の気配がするし、このまま歩いていけばグレンの鮮やかな紅は直ぐに見つけられると思った。

まだ、戦場のあちこちで、小規模な争いが起こっていて、無国の兵達がホムラ兵に投降を促している。

ヨルのローブは無国魔法部隊の支給品と同じ為、間違つて仲間から攻撃される事はない。

深い深い赤のローブだ。コレはヨルも大変お気に入りだ。

念の為に結界を纏つて、子犬に身を変えたステラを抱っこしながら歩いていると、1人の無国の兵がヨルに近寄ってきた。

「あの、ヨルさん……。ですよね？グレン団長がお探ししていました。『ジラス將軍を捕らえ、ホムラ国皇太子殿下と共に本部天幕に移動したから、そちらに来てくれ』と、仰っていました」

そう伝言を伝えてくれた兵に、ヨルはニッコリと微笑んだ。

「ありがとうございます。すぐにそちらに向かうことにします。では・・・」

ヨルはその場で、ステラと共に転移した。

そこに残された兵は、顔を赤らめたまま硬直していた。

言うまでもなく、ヨルの笑顔を正面から見てしまったが故に。

天幕から少し離れた場所に転移したヨルは、周りを見て驚いた。

天幕の周りは沢山の兵達でこった返していたのだ。

（天幕の前に、ぜんぜん転移ポイントがないと思ったら、沢山の人でスペースがなかったただだったんだ・・・でも、どうしよう？これじゃあ天幕に近づけない。）

どうにかして人を掻き分けながら、天幕に近づかなければと歩み出そうとした時に、突然の大音量が鼓膜に響いた。

それはもう、頭がクワンクワンとするほどの大音量だ。

空気がビリビリと震えるような大音量に、騒々しかった辺りが一瞬で静まりかえった。

ヨルは、音の発生源が自分の胸におとなしく抱かれているステラだと気付いた。

（ステラ！？なに？突然どうしたの？）

ヨルの問いかけに、ステラは答えることなく、フフンと得意げな顔をしている。（所詮、ドヤ顔）

ステラは何かに気付いたのか、勝手に納得して、ヨルの腕に抱かれたまま目を瞑ってしまった。

（ちょっと！ステラ！？）

ヨルは、答えをくれないステラに、それ以上問いかけることをあきらめた。

ふと、周りがやけに静かなのに気付いたヨルは、顔をゆっくり上げて周りを見渡した。

（ひいー！！ステラ！なんてことするのよ！すごい目立ってる！みんな見てる〜（泣））

動くにも動けず、注目された状態で固まっていると、ステラの声を聞きつけたミストが天幕から出てきていて、ヨルを迎えに来てくれていた。

おかげで、このいたたまれない空気からの脱出ができた。

ステラのおかげ？でスムーズに天幕まで行けた。（事にしておく）

天幕に入ると、そこにはグレンとシアン。そして、レンが立っていた。

捕らえられたグラス將軍は、縄で拘束された状態で天幕の隅で気絶していた。

ヨルとミストに気付いたグレンは、一瞬グラス將軍に視線を移して、すぐにミストに戻した。

「ミスト、グラス將軍を連れて行ってくれ。それと、城に通信で戦闘終了の報告と、事後は追って連絡をすると伝えてくれ。」

「はい。それではヨルさん、失礼します。」

「あつ、ミストさん！迎えにきてくれて、ありがとう！」

ミストはすぐに部下を呼び、気絶しているジラス將軍を連れて、天幕から出て行った。

「ヨル、こっちにおいで」

グレンに呼ばれて側まで行くと、ヨルの頭にグレンの大きい手がポンと乗せられ、優しく頭を撫でてくれる。

「今、レン皇太子殿下から話を伺ったよ。よく頑張ったな。2人も（1人と1匹）ケガはないか？」

頭を撫でられ、ようやく張っていた気が緩んだ。

「うん。大丈夫だよ。ステラも私も。それより、レンから話を聞いたって・・・」

「（レン？）ああ、殿下の意志と、今後の方針だ。レン殿下？我々の一存で全ては決められないが、こちらとしてもあなたが王になられたほうが、これ以上の無駄な戦いをさけられそうです。今は、御身を無事に国に帰すことが大事ですね。あなた1人なら転移も可能かもしれませんが、軍を率いてならそうも行かないでしょう？」

「いや、私の話を聞いて、信じてもらえただけで充分だ。このまま、軍を率いて一度エンエンに立ち寄る。そこで軍を立てなおし、ホルムラ国に戻ることにする。国内を平定するのは時間がかかるかもしれないが、必ずやり遂げてみせる！」

「はい、我々もすぐに陛下にこの事をお伝えします。平和を好まれるお方ですので、和平実現も夢ではないでしょう」

グレンとレンがしっかりとお互いの手を握り合っていると、天幕にレンの従者シュウとミストが入ってきた。

必死で走ってきたのであろうシュウは、息も絶え絶えな様子だ。レンを見つけたシュウは、足をもつれさせながらレンに駆け寄っていた。

「で、殿下！レン殿下、ご、ご無事で……。心配したんですよ！お1人で行くと言われて、その後何にも連絡がないまま戦いが終結してしまっただからです！」

少し遅れて、ミストがグレンに近寄ってきた。

「こちらに戻る途中でこの方が、必死でレン皇太子殿下をお探したたのでお連れしたんですが、よろしかった……。みたいですね。あと、ジラス將軍は拘束したまま、結界に封じてあります。城にも通信を入れました。入れたんですが……。通信に陛下がお出になられて、『はやく帰って来い！それと夜の姫も連れて来い！』と言われました。事後処理は団長達に任せるとのことです。」

「ああ、わかった。……。陛下の件は後でな。」

レンを見ると、シュウに半泣きで縋られていた。

「色々と手が離せなくてな、とりあえず戦いは終わりだ。シュウ、私は国に戻り政変を起こす。父君には玉座を降りていただくことにした。今頃は、敗戦の知らせを受け、さぞお心を痛めておられるはず。」

今後は玉座を降りて、ゆつくりと養生していただくことにしようと思う。」

レンの言葉にシュウが、ガバツと顔を上げた。

「では、殿下・・・、はい。はい、わかりました。私は仕事ができましたのでこれで失礼致します」

そう言うと、シュウはすばやく天幕を後にした。

「シュウは有能だ。手回しはあいつに任せておけばいい。後は、いかにしてスムーズに父君を玉座から下ろせるかだな。・・・そういえば、ヨル？」

突然話を振られたヨルは、レンと向き合った。

「なに？」

「魔法の話なんだが・・・、アレは、魔法の仕組みというか、構成自体を無視してなかったか？ヨルの魔法は、魔力の揺れ（放出）とほぼ同時に発動していた。あまりにも早かったから、ガードする時間がなくて、転移して避けてたんだが・・・。」

「ああ・・・うん。・・・その話は、レンが王様になってから教えてあげる。レンが時間を取ってくれたら、約束通りお茶をしましよう？そのときにね？」

ヨルの魔法は、この世界にある魔法の法則を完全に無視していた。あの時ヨルは、3つの魔法を同時に発動させた。精神が複数あるわけではないのだから、普通はできない。

普通、風と火を同時に出したいなら、どちらかの属性魔法を先に魔石に込めておく。

さらに、形態を竜巻に変化させるなら、両方の属性魔法を魔石に込めておく。

それを同時に発動させ、竜巻として発動させる。

一般的な魔法使いは、魔石をブレスレットやネックレスなどに加工して持ち歩き、常にいくつかの魔法をストックしている。

ヨルのように風と火を同時に出し、竜巻にして打ち出すなんて、普通の・・・いや、この世の魔法使いで、そんなことができる者がヨル以外にいるのだろうか？

ヨルの力はあまりにも絶大だ。利用しようとする者が現れるかもしれない。

そうなつてからでは手遅れだ。今のうちに確固たる力を手に入れ、ヨルを護れる立場を作る。

そう、ヨルを護る。レンには、それがまるで自分の使命のように感じられていた。

これは恋や愛ではない。それよりももっと崇高なものに思えた。

「了解した。必ず王になってヨルと茶をする、約束だ。」

2人は向かい合つて、互いの手を握り合つた。

「はい、必ず。」

レンは、前をしっかりと見据え、天幕を出て行つた。

本当の困難な闘いはこれからなのだ。

政変を起こし、レンが王として立つても、国内を正常化するまでには大変な時間がかかるだろう。

しかし、困難を目の前にしていても、前を・・・、未来を見てい

るレンの力はゆるぎないものだ。

きつとレンはやり遂げる。何故かそんな確信がヨルにはあった。レンとは必ずもう一度会う。そして一緒にお茶をするのだ。

そんな予感に心躍らせながら、天幕を後にするレンの背中を見送った。

「さて、戦争は一応の終結を迎えたわけだけど、どうするんだグレン？」

「今の時点では、国境はガラ空き、エンエンもほったらかし状態だ。臨時でここから兵を編成するしかないだろうな。・・・シアン、頼んでもいいか？」

「了解。エンエンには俺の副官のジンを、国境守備には俺が行こう。」

「ああ、よろしく頼む。俺はスイエンに戻り、陛下に報告する。ヨル？」

自分の思考に集中していたヨルは、突然のグレンからの呼びかけに驚いたのか、思わずステラを下に落としてしまった。

落とされたステラは、見た目子犬でも、さすがは魔獣である。それは見事に着地をしてみせた。

数秒ヨルの顔をじっと見つめた後、小さく息を吐くと、そのままポテポテと歩いて天幕の隅に置いてあった椅子の上に乗し、お昼寝の続きを始めた。

「・・・う、ごめんステラ。」

2人のやり取りを見て微笑んでいたグレンだが、これからヨルに伝える事に、良い返事がもらえるかは自分にかかっている為、やや緊張気味に話し始めた。

「ヨル、レン皇太子殿下とも話していたんだが・・・、この戦いでヨルはちょっとした有名人になってしまったんだ。一般人レベルじゃなくて、騎士や兵、たくさんの魔法使い達がヨルの戦いを目撃している。このまままた、前のようにフリーの魔法使いに戻るのは危険かもしれない。強い力は守りの力にもなるが、破壊の力にもなる。ヨルにその意思がなくても、悪いことに利用しようとする人間はいるんだ。だから・・・、だから俺と一緒にスイエンに来ないか？」

「・・・・・・・・え？」

まさかのグレンの言葉に、ヨル自身驚きを隠せないでいた。

第15話 『和平 への 歩み』（後書き）

グレンとレンは、ヨルが来る前に、ヨルを護る為の話をしていたハズです！

いよいよ、白の陛下とのご対面がせまってきました。

次か、次々ぐらいから、王城編になります。

ここまで読んでくださってありがとうございます（＊・・・）

＊――）ペコリ

第16話 『共に・・・』（前書き）

ここまでで、第一部完了です。

つたない文章で、読みづらかったらと思うと、申し訳なさでいっぱいです。

それでも、ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

第16話 『共に・・・』

「スイエンにつて・・・、私とステラが中央に住むつてこと？」

ヨルにとって、この誘いは予想外だった。

自分が利用されるかもしれないなど、考えもしなかったからだ。
自分の利用価値など、無いに等しいとさえ感じていた。

「ヨル、ヨルは自分の価値を考えた事があるか？俺達からしたら、ヨルは優しい娘だと知っているから、どんなに強い力を持っていたも怖くはない。それに、人を傷つける力はヨルが傷つくから使わせたくない。だけど、ヨルの力だけしか知らない人から見たら？力を恐怖する人、その力を利用して戦争を起こそうとする人、・・・そんな人間も確かにこの世にはいるんだ。だから、俺と一緒にスイエンに来てくれると助かる。その方がヨルを護れるし、何より『俺が』ヨルを護りたいから」

グレンの一言一言に、耳を澄ますように聞き入っていた。

ヨルの為、ヨルを護りたい・・・その響きはヨルにとって、魔法のような言葉だった。

いつも、グレンの言葉だけは簡単にヨルの心の壁を乗り越えてしまふ。

（どうして、・・・どうしてこの人の言葉はこんなに切なく胸に響くんだろっ）

お母さんの言葉は、暖かくて優しい言葉だった。
でも、グレンの言葉は、切なくて涙が出そうになる。

ヨルは、グレンの言葉にどう答えるか正直困惑していた。
今まで、自分の容姿を気にして、人が多いところは避けてきた。
いくら言われ慣れていても、心無い言葉に傷つかないわけではな
い。

（でも・・・でもグレンは護ってくれてるって言うてくれた。私、
信じてみてもいいかな・・・）

ヨルは、椅子の上で目を瞑っているステラに視線を据えて、心で
語りかけた。

ステラ、グレンを信じて、スイエンに行ってもいい？

ステラは目を開け、椅子の上でお座りした状態でヨルの瞳を覗き
込んだ。

傍から見れば、ヨルとステラが無言で見つめ合っている不思議な
状態だが、誰も口を挟むことはなかった。ヨルの事は、ヨルが決め
なくてはいけないからだ。

私は、ヨルには人の中で生きて欲しい。だってあなたは『人』な
のだから。人として幸せになってもらいたい。もちろん、その横に
は私が居なくちゃ駄目だけどね。だから、ヨルがスイエンに行きた
いなら行けばいい。ヨルは自由に生きればいいの

あはは、ステラってばいつも私を甘やかしすぎ（笑）。でも、あ
りがとう。人と接する事を怖がってばかりじゃいけないね。私、も
っともっと堂々と自由に生きてみたい

ヨルは、ジツと待っていてくれていたグレンに体を向けた。

「はい。私、中央に行きます。でも、中央に住むってどうすればいいの？」

グレンはヨルの返事に、正直ホツとした。

もし断られれば、どうやって説得するかを考えなければいけなかった。

「住む場所も、今後のヨルの待遇も、決して悪いようにはしない。ただ今後は、魔法使いとして王城に勤務することになると思う。もちろん、ヨルが嫌なら無理強いはいしない。」

「ううん。ただそこに居ればいいって言われるよりずっといい。私にも仕事があるなら嬉しいよ。でも王城って、王様が居るところだよな？私がそんなところで働いていいの？」

ヨルの不安は、ヨルの１８年間を思えば仕方のない事かもしれない。

少しずつ、人と触れ合い、受け入れてくれる人が居ることを知っていた。

それでも、全ての人が受け入れてくれるわけじゃない事も知っている。

神聖な、それも選ばれた人しか入れない王城に、自分が勤めているのだろうか？という不安は、ヨルにとって至極当然のものだった。グレンは、ヨルの不安を拭うように優しく頭を撫でながら、ヨルの欲しい言葉をくれた。

「ヨルは偉大な魔法使いだ。胸を張り、堂々していればいい。ヨル

は、ヨルらしくいれば何も問題なしだ。」

シアンもミズトも、グレンの言葉に同意するように、大きく頷いていた。

ステラは、またウインクなどして見せている。

まだ完全に不安が拭えたわけではない。だけど、護ってくれる人が、人達がいる。

「うん。私は、私らしく生きていたい。グレン、よろしく願います。」

ヨルは、大輪の花のように美しく微笑んだ。

今は昔、忘れられた神々の時代

夜と闇を司る、運命さだめの女神『エカトウリユシカ』は、1人の人間に恋をした。

灼熱を纏ったような、鮮烈な魂の輝きを持つ人間。

エカトウリユシカは、その人間に夢中だった。

その人間を愛するあまり、『人』になりたいと思うほどに焦がれていた。

人間の男もまた、女神を深く深く愛していた。

面白くなかったのは、昼と光を司る、導きの男神『サクトウリユ

ース。

永遠に共にいるはずの片割れを、人間に取られると思い込んだ。

それは、いつから始まったのか、誰が始めたのか、誰も知らない。いつしか人と神は、争うことを選んだ。

人の味方をしたのは、運命さだめの女神『エカトウリュシカ』と、彼女を護る『金の盾』。

神の軍を率いるのは、導きの男神『サクトウリュース』と、彼を護る『銀の盾』。

全てを飲み込む最強の『剣つるぎ』と、闇を切り裂く唯一無二の『剣つるぎ』が何度も交わった。

何度も、何度も剣つるぎが交わり、終りが見えぬ戦いが何日も何日も続いた頃、サクトウリュースの一瞬の隙をエカトウリュシカは見逃さなかった。

全てを飲み込む最強の剣つるぎで、サクトウリュースの胸を貫いた・・・はずだった。

しかし、エカトウリュシカつるぎの剣が貫いたのは、己の愛する人間だった。

まさに、サクトウリュースの胸を貫くその瞬間に、2人の間に割り込んだのだ。

女神の片割れを、女神自身の手で討たせなくなかった。優しい彼女は必ず後悔し、悲しみ続けるだろう。男は、彼女の心を護りたかったのだ。

剣つるぎを受けた瞬間に、愛する女神に己の想いを伝えた男は、女神に微笑みを残してその命を終えた。

強大な神の剣で貫かれた人間の男は、痕跡を一切残さずに世界から消えてしまった。

まるでそこに最初からいなかったかのように。

その瞬間、世界が慟哭した。

一瞬で空は闇に包まれ、雷鳴が轟き、激しい雨が大地を襲った。愛するものを、自らの手で殺してしまった。その事実がエカトウリュシカから正気を失わせた。

ただ、愛するものと共に生きたかったただだった。
もう逢えない人を探し求めるように、女神の悲しみが世界を覆いつくした。

あまりにも深い悲しみに、心が壊れ悲鳴をあげる。
女神を救う為、金の盾と銀の盾が命をかけても、女神の慟哭は止まらなかった。

サクトウリュシカは、片割れを救う為に自らの命で、エカトウリュシカの命を止めた。

エカトウリュシカは、愛する人と共にいたかっただけ。

サクトウリュシカは、愛する片割れと共にいたかっただけ。

ただ・・・、ただ、それだけだった。

エカトウリュシカが消えた後、何百、何千年立っても、女神の悲しみは世界を覆い続けていた。

わずかに生き残った人々は、強大な神の力を恐れ、闇を恐れた。
闇に対する恐怖は、人々の記憶から神々のことが忘れられても残り続けた。

何故、闇を恐怖するのか……。それを識る『人』は、今はもういない。

女神が振るっていた、聖銀の剣つるぎは、今も女神の悲しみを浄化する為に、この世界のどこかに在るという。

意志持つ剣けんは、いつかまた彼女にめぐり逢う為に、この世界に在り続ける……。

第16話 『共に・・・』 (後書き)

次からは王城編になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9090v/>

深遠の闇に愛されし夜の魔女

2011年11月11日03時25分発行